

7. 参加者アンケート集計結果

研修事務局

研修終了後、参加者にアンケートの記入を依頼した。内容及び集計結果は後掲のとおりである。

今回印象に残ったのは、各参加者の議論の参加度が総じて高かったことである。NGO-JICA 相互研修は年々両者のプロジェクト担当者による具体的で実践的な議論が主要な部分を占めるようになってきていたが、一方でこれは経験の少ない若手参加者や現場を直接持たない団体のスタッフにとっては、多少議論についていき辛く、結果として抽象的・観念的な結論を導きそうになるという側面もあった。

ところが「人間の安全保障」をテーマに据えた今回は、自らの経験に照らし合わせて議論できる切り口が数多くあったのか、どのような背景の参加者も積極的に意見を述べ合う様子が見られた。講師・パネラーやファシリテーターは質疑応答や進行に大変であったと思われるが、参加者の関心や疑問に少しでも答えようと努めていただいた。アンケート集計に表れた参加者の高い満足度はその所産であると言えよう。

「人間の安全保障」の概念の理解度が、研修を終了後もそれほど高くないという結果は、学問的な見地のみならず、現場実務者の実感としても現実を反映していると思われる。しかしながらこの集計結果からは、「よく分からないからこの概念には価値がない」というメッセージは聞こえてこない。多くの参加者が定着途上にあるこのスケールの大きな概念を今回の研修で「現場から考え」ようとし、その結果を各自の事業実施に活かそうと努めていただけた様子が伺えるのではないだろうか。



【JICA 参加者アンケート結果】

Q1. あなたはこの研修に何を期待していましたか。その期待は満足されましたか。

【期待していたこと】→【満足度】

- ・ 人間の安全保障に対してどう認識されているかを知りたい。
→認識は個人で異なることが分かり、印象的であった。一方、これが少しずつでも一致していくようになってほしい。
- ・ JICA と NGO の活動と考え方の違いの把握と相互理解を深めること。
→公私共々いろいろな意見交換ができ、非常に満足している。
- ・ ①人間の安全保障について学ぶこと。 ②NGO の方とたくさん交流すること。
→①様々な議論を通じて学ぶことができた。 ②NGO の方と交流できた。高い満足度。
- ・ NGO と JICA 相互の関係作りと人間の安全保障に関する事例や視点を学ぶこと。
→参加者と議論することで相互理解を深め、また、人間の安全保障に対してお互いの出来ることを考えることができた。90%くらい。
- ・ ①人間の安全保障の考え方を見直し、NGO・JICA の参加者がどのように捉えているのかを知ること。
②担当している案件がなぜ「人間の安全保障モデル案件」に選ばれたのかを知りたい。
→①満足。②未だ少々不明。
- ・ 人間の安全保障のコンセプトの整理と現場・業務への応用
→80%
- ・ ①「人間の安全保障」についての理解を深める。②NGO 関係者と知り合い、考え方を学ぶ。
→80%
- ・ ①人間の安全保障を再度じっくり検証する。②JICA と NGO が一緒に何かできるか確認する。
→①「人間の安全保障」を噛み砕いて理解できたため、満足度は高い（理解できない部分も若干あったが、様々な解釈がある、ということを確認した）。②具体的な連携の仕方について検討する時間が欲しかった。
- ・ 「人間の安全保障」という概念、考え方を自分のものとする。
→90%は自分のものにできたのではと思う。
- ・ JICA-NGO 間の相互理解。テーマに沿った意見交換と議論から出る新たな視点、アプローチ。
→良い。
- ・ 人間の安全保障という概念について考察し、実際の現場で生かしていけるような視点を見出したい。
→参加者の方々との議論を通じて、考えるべきポイントが少しずつ見えてきた。確固たる答えのない概念ではあるが、共有していくということについて相互理解が高まったと思う。
- ・ 人間の安全保障に関する自分なりの概念整理。NGO の方々とのネットワーク作り。
→どちらに関しても、ほぼ期待は達成された。
- ・ 人間の安全保障の視点から JICA と NGO の立場でどんな活動が望ましいかを NGO の人達と率直に意見交換できることを期待していた。
→2 日間にわたり夜遅くまで協議したので、NGO との意見交換としては満足したが、時間配分等ではやや不満が残る。
- ・ NGO の方々との対話を通じて「人間の安全保障」に対する理解を深める。
→これまで接点のなかった NGO の方々の話を聞き、非常に興味深かった。

Q2. 研修を通じて、疑問点、不明な点は解消しましたか。またどのようなことを多く学びましたか。

(1) 「人間の安全保障」の概念、NGO、JICA の取り組みについて

- ・ 概念はある程度理解できたが、視点の明確さは改善の余地あり。NGO、JICA の取り組みはある程度理解できた。
- ・ 事例をもとに分析したことが人間の安全保障の“意識化”につながった。また、NGO、JICA の相互協力による可能性を感じることができた。
- ・ 保護とエンパワーメント、視点。包括的に様々なキーワードから学ぶことができた。
- ・ NGO の具体案件事例をたくさん聞いて、貧困層へのアプローチの大変さに気付かされた。
- ・ 概念が難しく、捉えにくいという印象はまだ残っているが、かなり頭の整理ができた。JICA の取り組みはまだ始まったばかりで、これからもっと良くしていけるよう私達も努力したい。

- ・ 概念については、通常「人間の安全保障」というと、「1人1人の住民に対する働きかけ」の部分に意識を持っていきがちだったが、双方の視点があることを認識できたように思う。けれども、やはり気持ちの中でじっくりこない感じはある。
- ・ NGOとJICA、各1つずつの案件を深く分析でき、そのプロセスで概念整理をすることができてよかった。ただ、他の案件ももっと知りたかった。
- ・ これまで「人間の安全保障」については「国家安全保障」に対比する言葉であるという薄い理解しかなかったが、保護のみならず能力強化などを含む細かい概念であることを理解した。
- ・ 概念について、これまで議論をするというよりは概念を踏まえて何をするか、ということを考えてきたが、初めて「議論」をする中で、自分の理解の甘さに気付いたことがよかった。一つの言葉でもNGOとJICAで解釈が違うということを学べた。(個人個人でも理解が異なっていた。)
- ・ かなり解消したと思う。シャプラニールの事例でJICAとの連携で変わったことなど他、事例研究から多く学んだ。
- ・ 概念があいまい(多義性)である一方で、今後NGO-JICAの事例の検討によって、今後の展開に希望が持てることを学んだ。
- ・ 概念については、やはりあいまいに感じる部分は残るものの、それを皆で議論できたので理解は深まった。今後、JICAとしてより分かりやすい言葉で説明していく必要があると思う。
- ・ エンパワーメント、連携 + 社会的弱者への配慮 ⇒ 意識化 とでも分かりやすかった。
- ・ 人間の安全保障の観点からNGO-JICAの活動を分析することで、お互いに欠けている視点、気付きが多くあった。また、課題として、いかに再貧困層へアプローチするかがあがった。
- ・ 概念については、今までは「7つの視点」から「人間の安全保障」を理解していたが、今回の研修を通じて様々な考え方に触れることができ、理解を深めることができた。取り組みについては、それぞれの特徴・強みを生かした援助と連携が重要であると感じた。

(2)「人間の安全保障」の実践に向けたご自身(または所属団体)のアクションプランについて

- ・ 計画、実施のプロセスで指針としたい。
- ・ 案件形成、実施の中で、人間の安全保障の考えを共有し、取り込んでいく。
- ・ 市民参加タスクについて、人間の安全保障を取り入れたNGO連携案件についてのあり方を提言したい。
- ・ 担当の草の根技術協力において、人間の安全保障の視点を具体的に盛り込みたい。
- ・ 草の根技術協力案件形成や事業実施のときに「人間の安全保障の視点」に基づき、事業実施機関であるNGOの地域住民への直接的裨益を重視するとともに、JICAが後方支援できるような枠組みを生み出す努力をしようと思う。
- ・ 人間の安全保障をビルト・インした案件を形成する。
- ・ 顧客志向を取り入れる。
- ・ 現在の仕事は管理の仕事であり、側面支援が中心となると思うが、例えばHPを充実化させることで、「つながり」を持てる可能性を感じた。
- ・ まずは今月実施中の案件検討にこの視点を生かす。
- ・ 在外で従事することになる自分の案件の協力の枠組みを「人間の安全保障」の観点で分析し、自分の考えをまとめる。
- ・ 現行の業務について、実行できることは積極的に行っていきたい。特に、地域戦略作成等のための資料については、近日中に作成できるので行っていこうと思う。
- ・ 今回の研修で感じたこと、学んだことを整理し、自分なりの再定義をしてみたい。そして現場への適用可能性を常に考えていきたい(案件形成・審査・評価における視点)。同時に、周囲の人たちとの共有化、一般の人々へ分かりやすく伝えていくことも行動に移していきたい。
- ・ インドネシアで2年間NGO連携促進の企画調査員として実践した、草の根パートナー事業等に関して、「人間の安全保障」の観点からまとめて、「国際ボランティア研究」誌に事例研究として投稿する。
- ・ 人間の安全保障の視点を国内機関(地域連携)に落としこんで考えるのは難しかった。このアクションプランを作るのに、もう少し時間をかけるべきでは。
- ・ 案件検討時に人間の安全保障の視点を取り入れ、特に弱者へ配慮する。
- ・ 個人的に今回の研修で、NGOの活動を十分に理解していないことに気づいたので、まずそれを知る

ことから始める。

3. 研修中、特に印象に残った点や良かったプログラムについてご記入ください。
 - ・ グループディスカッションで双方の事例をあげ、この分析を行った点。
 - ・ 事例分析。
 - ・ 人間の安全保障の取りまとめ（2つの事例分析）と発表準備。NGO と様々なディスカッションする中で、彼らの考え方を知ることができた。
 - ・ グループワークによる事例分析と改善案検討。参加者同士の意見交換ができるとともに、自分の頭の中の整理にもなった。
 - ・ グループワーク 2 と 3。かなり激しく議論し、発表には出ない様々な意見が出た。自分にはない視点のものも多く、新鮮だった。
 - ・ 初日のプレゼンテーションとディスカッション。
 - ・ 全てのプログラムが良い感じだった。特に、事例発表後のセッションで、NGO の方々が“つながれる”感覚を抱いていたのが印象的だった。
 - ・ グループワークの時間がたっぷりあって良かったと思う。
 - ・ 双方の事例紹介をして、案件の比較検討を行ったこと。
 - ・ グループディスカッション及び各グループの発表をシェアできたこと。
 - ・ アクションプラン作成とそれをシェアしたプログラム。皆の個人的な活動、ビジョンまでシェアできて、刺激を受けた。
 - ・ 全体会でのグループワーク発表は良かった。
 - ・ 全体会 1。人それぞれの考えや視点を共有するのはおもしろかった。
 - ・ 長い時間をかけた事例分析。NGO、JICA がお互いの事例分析することで、お互いに足りない部分を知ることができた。
 - ・ 事例分析（NGO）が勉強になった。
4. 研修の準備や進行について気づいた点、今後の改善や要望事項があればご記入ください。
 - ・ グループ間の意見交換、ディスカッションの場を中間に入れてはどうか。
 - ・ 事例がある程度比較可能なものであればなおよい。
 - ・ PCM のように事例案件の情報が分かりやすく収められているとなおよい。
 - ・ 研修期間が短い。
 - ・ 夜遅くまでの作業はつらい。
 - ・ グループにわかれた冒頭にアイスブレイクを取り入れてほしかった（最初から仲良くなるため）。
 - ・ 事例紹介者について、人間の安全保障の視点のための分析に使用されるという前提でプレゼンテーションしてほしかった（おそらく案件概要紹介としてのプレゼンテーションであった）。
 - ・ もう少しインプット（事例紹介など）の時間があればよかった。
 - ・ 最終日の発表について、予め詳細な情報がほしかった。
 - ・ JICA では当然のように使っていても、一般的に理解が異なりやすい単語（保護、権利、人間の安全保障、エンパワーメント…）があるので、進行の際にも注意すべき。
 - ・ スケジュールがややタイトだった。
 - ・ 案件の情報がまちまちだったので、もう少し比較できるものをそろえてほしい。
 - ・ 具体的な事例検討の前に、基本概念についてのディスカッションの時間をもう少しとれればと思った。
 - ・ JICA 側の事例について、より具体的な活動まで言及したほうがよかった。
 - ・ 深夜まで協議するような進行については疑問が残る。
 - ・ 各参加者が作成したアクションプランは、全員で共有しなくてもよいのでは？
5. NGO-JICA 相互研修につきまして、感想、ご意見、ご提案等がございましたらご記入ください。
 - ・ 参加された NGO の方のデータベース作成。フォローを続ける。
 - ・ 普段の業務で NGO の方々と接する機会がほとんどないことから、NGO の方々の考え方は事業内容を検討していく上で参考になった。今後も連携を深め、人間の安全保障を人々の心に普及していきたい。

- ・ とてもよい企画。今後も続けてほしい。
- ・ 事前課題は1ヵ月くらい前に配布してもらえれば、余裕を持って読むことができる。
- ・ 日程的にはハードだった面もあるが、なんとなく分かった気になっている人間の安全保障について、突き詰めて考えるよい機会だった。同じ組織の人間同士で議論すると見えてこないかもしれない面について考えることができた。自分自身の反省も含めてだが、JICA側の参加者、発表者の経験が浅いのが気になった。
- ・ もっと時間があれば幅広い議論ができたように思う。この生活が長くなるとちょっとつらい気はするが……。本当によい機会を得たと思う。
- ・ 人間の安全保障について様々な角度から光を当てることができ、それによって実際の業務に使えるアイデアを得ることができた。
- ・ 他のグループの人と知り合う機会がもっと多ければよかった。
- ・ 楽しかった。また機会があれば参加したいので、今後も続けて行ってほしい。
- ・ すごくよく作られていると思う。検討委員の方々の尽力に感謝している。
- ・ いろいろな方の意見が聞けてよかった。また、みんなで話し合っただけで構築していくのも楽しかった。
- ・ 普段の業務の中ではなかなかこのように深く考えて、他の人と議論する時間がないのでとても新鮮だった。NGOの人、JICA内でも普段会わない人（ジュニア専門員、インターン含め）の人と深夜までディスカッションできたことにより視野が広がり、人のネットワークを広げる貴重な機会ともなった。
- ・ 各NGOのプロジェクト紹介の時間がほしかった。JICAもNGO連携事業を紹介できる。
- ・ 検討委員、事務局の方々ののおかげで非常に有意義な時間となった。自分も含めてだが、もっとJICA内でフィードバックが必要。

6. この研修は、一人一人の「参加」で成り立っています。

(1) この研修に対する、あなた自身の「参加度」はどうでしたか。

- とても満足……………2人
- 満足……………8人
- 普通……………4人
- やや不満……………2人
- とても不満……………0人

【その理由】

(とても満足)

- ・ 交流が深められた。
- ・ 自分が思っていた概念と他の方々が思っている概念の共通点や違いがわかってきたため。

(満足)

- ・ NGOとの交流（当初の目的）を十分果たせた。
- ・ 現場経験や具体案件を担当していないので、NGOの方と意見をぶつけ合わすまでには至らなかった。
- ・ 初めて会った人も多く、もう少し多岐にわたる会話の中で結論を見出せばよりよかったと思うから。
- ・ 理念・理論の部分では勉強不足がたり、あまり参加、貢献できなかった。
- ・ 自分の現場の経験などを多く共有できた。
- ・ スケジュールがタイトだった。
- ・ 比較事例の情報がやや不十分だった。

(普通)

- ・ なるべく発言をするよう心がけたが、経験が浅く、知らなくて応えられないこともあった。
- ・ 自分の経験が少ないので、現場からの視点で発言することがあまりできなかった。

(やや不満)

- ・ 職務でどうしても個人的に欠席せざるを得ない部分があった。

(2) あなた、あるいは他の参加者の「参加」をもっと促すことが必要だとすれば、どのような工夫が

考えられますか。研修主催者側の取るべき工夫、参加者自身の取るべき工夫などについてアドバイスをお願いします。

- ・ 小グループ化、ペア化による作業により参加促進ができたのではと思う。
- ・ 土曜日は含めない。時期を検討する（9月～11月は結構忙しい）。
- ・ 発表の機会をもっと増やす。
- ・ 他グループとの交流の機会を増やす（話をすることのないまま終わった人もいた）。
- ・ 意見交換会はゲームなどを取り入れて、楽しく盛り上げるとよい。
- ・ 事前の勉強をしっかりとすべきだった。特に JICA における人間の安全保障の取り組み状況を詳しく知っておくこと、プロジェクト実施におけるプロセスや制約などを理解しておくことが必要だった。
- ・ 参加者自身をもっと勉強して研修に臨むべきであったと思う。特に NGO の方々の勉強熱心さに感心した。
- ・ 発言が止まっているときの対応として、1人必ず1個アイデアを出させるなど、積極的に発言を促す。（発言が止まることもグループワークの一環だと思うが。）
- ・ 研修生の中から順番で司会進行役を出す。
- ・ 発言する前にポストイットに書くというルール徹底。
- ・ アイスブレイクやグループ化、グループ替えなどは工夫されていたので、効果的であったと思う。
- ・ グループ内で、普段の活動などを含めた詳しい自己紹介もしくはアイスブレイキングがあると、もっと最初にお互いのことを知り合えた気がする。
- ・ 2日間で実施するのであれば、金曜夜から日曜午後までにしたほうが仕事から離れて集中できる。
- ・ 参加者の興味別でグループ分けしたらいいと思う。それから、入門～上級とレベル分けして見ては。
- ・ とてもバランスのとれたグループ構成、人数だった。
- ・ もっと少人数グループでもよかったのでは。

【NGO 参加者アンケート結果】

Q1. あなたはこの研修に何を期待していましたか。その期待は満足されましたか。

【期待していたこと】→【満足度】

- ・ 正直に言うと、「人間の安全保障」の概念への理解をより深めたいというよりも、JICA・NGOの方々との横のつながりを作りたくて参加した。
→非常に満足した。横のつながりになるかはこれからだと思うが、JICAの方々も目指していることは我々と同じだということがわかり、今まで以上に親近感がわき、今後同じ目標に向かって協力してゆけると感じた。また、NGO間の連携の可能性も感じた。
- ・ 国際協力のあり方に理解を深めること。
→非常に充実した3日間だった。
- ・ JICAの人間の安全保障への取り組みを知るとともに、JICAとNGOの相互理解の機会とする。
→満足
- ・ 人間の安全保障という概念の具体的内容を明確にする。
→研修参加前と理解の度合いは変わらずあいまいなままであったが、様々な解釈が当てはまるという事は悪いことではない、という結論に着地。
- ・ JICAと他のNGOについての理解・意見交換。人間の安全保障の理解。
→満足
- ・ 「人間の安全保障」概念の付加価値検証
→当初の予想が確認できた。
- ・ 漠然としたイメージを持っていた「人間の安全保障」を理解するヒントを得る。新しい人間関係の形成。
→密度の濃い研修だった。非常に満足。
- ・ 「現場から考える～」とのテーマにあるように、「現場」の視点に重点をおいた「人間の安全保障」の考え方の整理。所属団体の事業・態度の見直し。
→非常に高い。ありがとうございました。
- ・ 人間の安全保障における、開発教育団体の役割を明確にする。
→何をすればよいか、何が足りないかがかなり明確になった。行動していきたい。
- ・ 概念の整理。
→50%。概念自体が含みを持っているあいまいさがあるので、どうしても答えが1つでなく、強弱が出てくる。
- ・ 参加者との意見交換をしながら、「人間の安全保障」についての理解を深めること。
→グループ間で密なディスカッションができた。事例分析を通して、「人間の安全保障」の視点を見直すことができた。
- ・ 人間の安全保障の概念をきちんと整理・理解する。
→様々なアクター間の連携が必要とのコメントが多く出され、JICA、NGO職員の考え方に直接触れ、相互理解を深めるよい機会であった。
- ・ 人間の安全保障がなぜJICAによって取り上げられるのか知りたかった。これまでの概念との違いについて知りたかった。
→大満足。なぜ取り上げられたのか、またその特徴について（おぼろげながら）理解できた。
- ・ 「人間の安全保障」の概念整理および各参加者の視点を確認し、意見を共有すること。参加者間のネットワークを広げること。
→いろいろな人の考え、特に同じグループの方々の考えを聞き、最終的にはそれを共有するところまで行き着いて、また楽しく場を共にすることができて満足している。
- ・ 「人間の安全保障」と自分のプロジェクトを相関づけて考えられるようになる。
→“期待していたこと”に対する満足度は、かえって何がなんだが分からなくなったという点で低い、議論は大変新鮮でおもしろく、“研修”の満足度は高い。

Q2. 研修を通じて、疑問点、不明な点は解消しましたか。またどのようなことを多く学びましたか。

(1) 「人間の安全保障」の概念、NGO、JICAの取り組みについて

- ・ 議論をしてゆく中で、一番重要な「人々の心にどう寄り添うか」という根本的な視点から乖離して、

言葉遊び（言葉の意味、定義づけ等）のようになっていった場面があり、疑問を感じた時間があった。しかし、議論を深めてゆく中で、JICA の人の考え方、NGO の人の手法等、お互いの理解を深める機会になった。ただ、「人間の安全保障」の概念についてはまだ漠然としている部分があるが、それでもいいのではないかという気持ちがある。

- ・ NGO、JICA の取り組み—それぞれの違い、得意分野、どう連携するのか、漠然とではあるがイメージできた。
- ・ 概念—日を改め、長期戦でじっくり、いろんな分野の方と話したい。
- ・ 人間の安全保障の目指すものを確認。視点の整理。
- ・ 自分は環境 NGO の立場から、人々を中心に据えた視点をプロジェクトに盛り込むことが新たな方向性として捉えられたが、教育・保健などの開発系 NGO の取り組みでは、もともと“人間への視点”が欠かせず、当たり前のこととしてあった、という分野間の相違を認識できた。
- ・ 概念は未だにあいまい。
- ・ 人間の安全保障の概念については言葉の定義にまだ明確でない部分があったこともあるが、基本理念を多様な視点から考えることができた。NGO だからできること、JICA だからできること、またはその逆等の点が議論をとおして明るみにできたことが非常に興味深かった。
- ・ 現状は概念があいまい。
- ・ 実際にどの程度プロジェクトに用いられるのか不明。
- ・ 発展における権力の問題が、センらの主要な問題意識のはず。それが抜けているところが最大の問題。人間の安全保障の担保は、その視点なしに不可能では？ JICA、NGO ともに開発過程における「権力」の問題に無関心な人が多い印象を受ける。
- ・ これまでの開発の反省を踏まえ、Down Turn の防止、社会的弱者など分析的な概念を押さえられたものだと思う。
- ・ 事例紹介の前に、グループワークでブレインストーミングをしたのが良かったと思う。「人間の安全保障とは何か」といった大まかな議論よりも、「どんな視点でケースを見るか」といった具体的な項目に絞ることによって、ケース分析、ケースを見る目がよりシャープになったと思う。
- ・ 解消まではいかなかったが、どこに共通点を見出せるかは明確になった。まずはこの概念をもって全国行脚、対話の旅をしてもらい、一年後再度テーマとしてセミナーをできればと思う。
- ・ 概念のポイントはわかった。整理をして、強弱のつけ方は個人差があると思うので、今の自分の業務に取り入れていきたい。
- ・ 研修前は「人間の安全保障」の概念はかなりぼやけたものだった。事例を分析することによって、概念の多様さ、幅広さを感じた。
- ・ 「人間の安全保障」の視点は、すでにプロジェクトに組み込まれていると思っていた。今回人間の安全保障を学ぶ機会を得たことで、担当のプロジェクトを見直す良い機会となった。また、自分の中で悶々としていたものに対して、確証を持てた。
- ・ これまでよりは理解できた。10 段の階段のうち今 3 段目位。
- ・ レクチャーで JICA、NGO のそれぞれの「人間の安全保障」の観点を学び、それを踏まえて事例分析を自分達で行うところまでできて、「人間の安全保障」を突き詰めることができたと思う。疑問等がまた今後出てくるであろうが、今回学んだことがその度に自分の中のシンクタンクとして働くようになるのではないかと思う。
- ・ いろいろな意見がありすぎて、ますます混乱した。少し日を置いてから、この研修を必ず振り返り、考えをまとめていきたいと思う。

(2) 「人間の安全保障」の実践に向けたご自身（または所属団体）のアクションプランについて

- ・ まずは、JICA の 7 つの視点を借りて、自分達のプロジェクトを見直したい。そして、修正できるところは修正したい。ただ、環境 NGO にとっては、このテーマは少し話しづらかった側面も否めない。
- ・ 「人間の安全保障」のビジョンを身近にすること。自分の団体と絡めて、一般の人とビジョンを共有し、会員拡大、ドナー、ボランティアスタッフなど。
- ・ 実際に事業計画の中に「少数民族の人間の安全保障会議」実施の項目が上がっているので、実践に努めたい。
- ・ 環境保全と地域住民の生活支援を両立させるための戦略（エコツーリズム、アグロフォレストリーなどの活動／プロジェクト）をさらに開発していく。プロジェクトのデザイン段階で“人間”の視

点を常に意識する。

- ・すでに感じてはいた部分を言語化していただいたと感じるが、自らの実践はまだまだである。
- ・今まで行われてきたプロジェクトが人間の安全保障のポイントをカバーできていたかについての分析とこれから始まる案件について、私が特に興味を持った“持続可能な能力強化”をきちんと取り入れていくこと。“人間の安全保障”について、“わかりやすさ”を重視して広く発信していく。
- ・所属団体で人間の安全保障の概念について深め、JICA 等との対話を行いたい。
- ・様々な議論が展開されているが、新たな視点として海外現場のみならず、国内、又プライベートに落とし込んでいきたい。
- ・具体的な現場に入るのはまだ先のことだと思うが、今回学んだことをどう自分に生かしていくかはある程度明確になったと思う。
- ・内発的発展を支え、促す開発教育活動。特に国内の開発教育活動と海外の開発教育活動の交流。
- ・弱者への配慮、最貧困層への支援ということが頻繁に出されたが、そもそもアフリカの弱者は相当色々いると思ったことから、1 回は「アフリカの弱者は誰がどこにいるのか」というようなシンポジウムを行いたいと思った。これは、国、社会的文脈でだいぶ違うと思う。
- ・アフリカ地域での HIV/エイズ対策を推進する中で、様々な機関との連携や包括的なアプローチが重要だと日々感じている。今後もコミュニティのエンパワーメントと包括的な取り組みをキーワードに活動を進めていきたいと思う。
- ・新たな視点をアクションプランに取り組むことができると思う。
- ・実務に活かす方法について学べた。
- ・「人間の安全保障」の実践を所属団体と自分自身に落とし込んで考えられた。基本的には、今まで実践しようと胸中に収めていたことを、「人間の安全保障」という観点から見直して、どうしていくかを考え直すかたちとなった。
- ・考えをまとめて、自分のプロジェクトを振り返り、発信できるようにする。→ドナー獲得につながれば…。自分のプロジェクトにも反映できればと思う。

3. 研修中、特に印象に残った点や良かったプログラムについてご記入ください。

- ・ JICA 本部訪問の JICA 改革案や JICA の考える 7 つの視点、長さんのプレゼンテーション等。プレゼンテーションは全て勉強になった。また、議論の場も、お互いを理解する上で非常に有意義だった。
- ・ プログラム全体会でのグループ毎に様々なポイントがあると同時に共有点が多くあったこと。プログラム以外「発表する」「まとめる」を抜きにしての意見交換。
- ・ ワークショップといっても、ただの話し合いだったため、エンドレスになった感がある。もう少し工夫があってもよかったかもしれない。
- ・ グループ討議では、JICA や他分野の NGO のプロジェクトやデザイン方法について見地を広げることができたと思う。
- ・ 牧野さんの話は面白すぎた。
- ・ 事例分析のワークショップ。人間の安全保障の理念についての整理と JICA、NGO の方々のこれまでの経験も踏まえた上での意見がたくさん出て、多くを学んだ。
- ・ グループワーク。ファシリテーターのナビゲーションも非常に良く、スムーズに楽しく議論できた。
- ・ シャプラニールの事例紹介は、内容・方法とも素晴らしかったと思う。形式美だけでなく、現実の成果、課題、展望がわかりやすくまとまっており、また人間の安全保障という観点にもよく合致していたと思う。やはり、現場の意見を生で聴けたことは、貴重な体験だった。
- ・ JICA 改革プランについて (JICA 総務部)。人として真摯に向き合って、悩みつつもより良い方向を模索している。現在の様子をそのまま伝えてくれた。
- ・ パネル討議「NGO と人間の安全保障」(長さん) ととても分かりやすく、多くの点に共感できた。また、これをポジティブに捉えていこうとする姿勢に新たな可能性も感じることもできた。
- ・ JICA、NGO のプロジェクトを「人間の安全保障」の視点から並べて比較できたのは良かった。初めてだった。JICA、NGO のスタッフが一緒のグループで議論、作業できたことは貴重で、こういうことが大事だと思った。
- ・ ポストイットを使った参加型であったこと。
- ・ JICA の方々の視点や対話を通じて聞いた。自分が思っていたより、意見に幅がなかった。
- ・ 自分自身のプロジェクトを「人間の安全保障」の視点から見直すよききっかけとなった。

- ・ 全体会—グループごとに違うまとめ方をしているよかった。
- ・ 全体会まとめ
- ・ グループごとのワークショップ。
- ・ 1日目、2日目のプレゼンテーション。勉強になった。
- ・ 事例分析。時間もかかり大変だったが、最後には皆の考えがまとめられてよかった。そのプロセスでたくさんの意見が出てきたこともよかった。
- ・ 夜中までの議論は楽しかったが、最後にキーワードを出す、アクションプランを作る等、レビューの時間があつたのはありがたかった。一言で NGO と言っても、様々な意見を持っている人がいて、多くの人の意見を聞けたことは自分にとって財産となると思う。大変勉強になった。

4. 研修の準備や進行について気づいた点、今後の改善や要望事項があればご記入ください。

- ・ 検討委員、JICA の皆さんが非常に時間をかけて、この研修を準備されたということがよくわかった。またファシリテーターの方も議論をうまく導いてくれたと思う。ただ、事前に読むべき書籍をもう少し早く送ってくれたらありがたかった。
- ・ 研修資料は早めにほしかった。
- ・ 夜通しとまではいかないが、深夜にわたって議論を続けるのはいかがなものか。せめて、20:00にはすべての作業を区切るべきだったと思う。
- ・ 研修全体が目指す結論が、個人的な見解では終始明確でなかったため、各議論の主旨について混乱することが多かった。最終的には、「人間の安全保障をどう位置づけるか？」ということへの答えを導き出すことが、本研修の目的だったのか。
- ・ 事例紹介のプレゼンテーションの後、人間の安全保障についての説明を聞くと、もう少し具体的にテキストを読めると思う。
- ・ 全体的に駆け足だった印象を受けたが、3日という限られた時間を最大限に使えたとも思う。
- ・ 「Good Practice」に相当するものを取り上げ、批判的に検証してもこの概念の有効性は見えにくい。「失敗しそうなプロジェクト」をいかに良くすることができるか、が重要では？
- ・ もう少しタイムテーブルに余裕が欲しかった。他のグループの方とも話しがたかった。
- ・ JICA 側からの事例紹介だが、現場に行ったことのない人が担当というのは、やはり問題があると思った。パワーポイントの内容も不要な部分が多く、全体の情報量も乏しかったので参加者に不必要な誤解を招いた感は否めない。担当者自身の問題ではなく、JICA の人選ミスだったのではないか。
- ・ チャレンジングなテーマであり、準備が大変だったと想像する。検討委員、事務局の方の熱意とホスピタリティーに感銘を受けた。地方での、さらに国内もフィールドでの研修を期待。
- ・ 研修日程は週末にかからないほうが好ましい。
- ・ 1日のプログラムが長い。
- ・ 全体を通して、とてもスムーズに進行を運んでいただいた。おかげで有意義な参加となり、感謝している。
- ・ もう少し時間にゆとりがあつた方がよかった。特に、最終日こそ議論したり、まとめたりする時間があるといいと思った。

5. NGO-JICA 相互研修につきまして、感想、ご意見、ご提案等がございましたらご記入ください。

- ・ 今後もこのような場をどんどん作ってほしい。この研修を経て、研修前と比べ、自分が少しパワーアップできたような気がする。そして、交通費、宿泊費等、全て負担していただいたこともありがたかった。
- ・ 今後も NGO-JICA の交流の場を作ってほしい。
- ・ JICA 側、NGO 側とも若い人の参加が目立った。特に、JICA では若い人の NGO に対する偏見は少ないようだ。より年代が上の人との理解の機会も欲しかった。
- ・ 今回の研修は、JICA、NGO のスタッフが交流するという意味では良い機会になったと思う。一方、このような相互研修がプロジェクト実施レベルで、実際に建設的な協力につながられるかは疑問。
- ・ 面白すぎた。「援助業界」というものの存在をはじめて知った。
- ・ 議論を十分終えるには時間が足りなかったかもしれないが、一つ一つのワークショップやパネルディスカッションの目的やそのための研修の流れがとてもスムーズだったと思う。疑問点だったのは、ファシリテーターの介入がほとんどなかったのだが、そういうものだったのだろうか？グループ内

で議論があまりにまとまらない、違う方向にいつてしまっている時等、少しまとめてもらえたらと思う場面が何度かあった。

- できればボランティアスタッフにもこうした研修を受けてもらいたい。より多くこうした機会ができることを望む。
- グループ内の親睦が深まったのは良いことだが、グループ間のコミュニケーションにもう少し時間が割けるような配慮も必要だったのではないだろうか。
- 立場が異なる中でもきちんと対話し、暫定的にでも「形にしてみる」ことの重要性を改めて実感した。ファシリテーターの「私達にとっての人間の安全保障とは」を今の段階で整理してみたら、との投げかけがポイントとなった。NGO 側（特に私自身）が、人間の安全保障をより良い方向へ向かう可能性をひめているものとしてポジティブに捉えていたものの、正直に言うと、現段階でどうしても必要なものと思えなかった。それは、人間の安全保障があるからこそ！という質的な向上を経験したことがなかったからだ。しかし、ファシリテーターの投げかけから、様々な議論が生まれ、グループメンバーの対話へと変化し、ひとつの、今の段階の私達の考えがまとまった。さらに、危険性と提案をも盛り込むことができた。まさしく、ファシリテーターの適切な介入により、メンバーの力が発揮される体験ができた。
- 少し Terminology に走っていたり、概念の議論に走りすぎているグループもあったようだった。せっかく様々な立場で開発に携わる人々が集まっていたので、事例の中での互いの強み弱み、改善点に集中すべきという印象も少しあった。
- このようなテーマを定めて、それを切り口とした研修の方が実り多いと思う。
- 研修中、夜くらいはもう少し本音で JICA と NGO のパートナーシップについて話す機会などがあればよかった。
- 閉会のあいさつにあったように、発表会（全体会）に JICA、NGO の管理職が出席したほうが良いと思う。（3 日間の研修を通じ相互理解を深めたが、その経験を個人レベルにとどめないため。）
- 通常、顔を合わせる、共に討論する機会が少ない NGO と JICA のコミュニケーション促進に非常に有効だと思う。年 1 回の宿泊型研修だけでなく、単発で日帰り型もやってほしい。
- この日程だと仕方ないのは分かっているが、睡眠時間はきちんととりたい。

6. この研修は、一人一人の「参加」で成り立っています。

(1) この研修に対する、あなた自身の「参加度」はどうでしたか。

- とても満足……………3 人
- 満足……………8 人
- 普通……………4 人
- やや不満……………1 人
- とても不満……………0 人

【その理由】

(とても満足)

- 内容の濃いプログラムと使いやすい施設だったから。
- 考えを言葉にしたり、他の参加者の意見、さらにその場で行っている心理的变化まで受け取り、自分の考えとして整理できたことなどから。
- 多くを学べた。

(満足)

- 広報担当で、プロジェクトに直接関与していないため。プロジェクトに重点をおいた意見交換に入りづらかった。
- ある程度グループ全員が話すことができた。
- グループ内で意見を共有できたこと、自分の考えを言えたことは満足である。ただ、全体会では時間がなかったこともあり、自分の考えを言うことは抑えてしまったのが少し残念だった。
- 普段議論する相手は、所属団体の人が多いが、団体の考えがいいか悪いかは別として、自分の視点や考えが狭いものになっていたのだと認識させられた。

(普通)

- ・ 他の参加者と比べ、開発に関する知識、経験が浅かったこともあり、時折発言が難しい面もあった。それに、後半体調を崩してしまった。

(やや不満)

- ・ 「人間の安全保障」の概念、内容を明確にするという個人的な目標が達成されなかった。一方、明確化するよりも、「意識化のツール」として位置づけられたことは一つの収穫であると思う。

(2) あなた、あるいは他の参加者の「参加」をもっと促すことが必要だとすれば、どのような工夫が考えられますか。研修主催者側の取るべき工夫、参加者自身の取るべき工夫などについてアドバイスをお願いします。

- ・ 参加者がこの研修の意義を広く宣伝することだと思う。ただ、今回の「人間の安全保障」は NGO にとって、また環境 NGO にとって、議論が広がらないようなイメージが最初にあったので、もう少し違うテーマのほうがよいかもしれない。
- ・ 各人のレベルに合わせたグループ分けには感謝しているし、やりやすかったが、同じ分野同士での意見交換の場が欲しかった。(広報という立場では難しいかもしれないが。)
- ・ 参加度の低い人の興味のある分野に話を向けたり、相談や質問をしたりする。できるだけ、その人が話しに入ってきやすいように休み時間に雑談したりするなどの工夫もする。
- ・ 本研修、特にグループ討議においては、全参加者が積極的に発言しており、参加の機会が十分に与えられていたと思う。
- ・ 似たような興味、経験等を持つ人ごとのグループを作って話し合う機会を設けるのはいかがでしょうか。考えが偏ってしまうかもしれませんが、全体の中で少しそういう時間があるのもいいかもしれない。3日間しかないが無理かもしれないが。
- ・ 現状でも十分だと思うが、さらに良くするとしたら、意見を出しやすい参加者へ何らかの働きかけをして、他の参加者が発言できる、ほんのちょっとのタイミングを作り出せたらと思う。
- ・ 時間と雰囲気。会場がフォーマルな感じだったので少し緊張感があったが、柔らかい雰囲気だったと思う。
- ・ 職場に報告し、スタッフに参加を勧める。
- ・ 現行で特に問題ないと思う。
- ・ グループをシャッフルする。
- ・ ファシリテーターの重要性を感じた。「参加」を促す、あるいは意見を引き出すのにファシリテーターの誘導は必要だと思った。参加者は自分で参加するよう心がけることはもちろん、ファシリテーターの誘導を見逃さず、適宜発言していくと良いと思った。
- ・ (特に NGO) 団体宛に広報するだけでなく、団体のいわゆる上層部の人に宣伝して、この研修への職員の参加を促してもらうようにする。

IV 海外研修

1. 海外研修の成果と総括

海外研修コースリーダー

武田 長久

1. 海外研修のねらい

国内研修では「人間の安全保障」の概念や七つの視点などに関して議論を行い、その視点に基づいた事例分析を通して重要な視点の絞込みがなされた。海外研修では、それら国内研修で見出した重視すべきポイントや概念自体の捉え方を持って実際に現場を訪問して分析することにより、国内研修で得た成果の有効性を確認し、更に国内研修では発見できなかった新たな重要項目を発見することを目的とした。

2. 訪問案件の選定

フィリピンでの海外研修の視察案件は「人間の安全保障」の要素を含んでいる案件として、JICA の事例では TESDA 女性センター強化プロジェクト、NGO の事例では(特活)草の根援助運動が支援しているフィリピン農村再建運動 (PRRM) の沿岸資源管理プロジェクトが選ばれた。TESDA の事例は職業訓練を通じて女性の経済的エンパワーメントの向上を図るもので、行政による機会の提供と民間との連携による研修修了者の受け入れ、NGO との連携による訓練機会の提供がなされていた。

フィリピンの社会問題の理解を進めるために JICA がコミュニティエンパワーメントプログラム (CEP) 事業で支援したパヤタスごみ処分場周辺のスラムで活動する NGO の現場視察を行ったが、偶然にも NGO が支援する女性たちが TESDA の短期研修を受けて自らの収入向上活動に活かしている事例を知ることができ、プロジェクトとの連携による効果を認識することができた。また、PRRM の沿岸資源管理プロジェクトでは NGO の支援により、バランガイ (村) レベル、町レベル、州レベルでの漁民グループの組織化とアドボカシー活動、町長を初めとする行政による支援の獲得がなされ、コミュニティのエンパワーメントと行政による支援が下からと上からのアプローチで実現されていた。二つの事例は「人間の安全保障」という視点から見ることで多くの学びや気づき提供してくれた。

3. 海外研修の成果

国内研修で議論した「人間の安全保障」の重要な視点をもとに、参加者それぞれ事前に海外研修で特に大事にしたい3つの視点を挙げてもらった。研修参加者は3つのグループに分かれて海外研修の準備を行ったが、3つのグループとも「人間の安全保障」で特に大事にしたい視点として「弱者への配慮」、「エンパワーメント」、「アクター間の連携」を取り上げた。研修ではグループごとに事例を題材にして議論をしながら「人間の安全保障」の3つの視点からプロジェクトのデザインや運営の仕方、評価などに関して意見交換を行った。また、JICAの案件、NGOの案件の分析のまとめ時間ではグループ間で分析結果の共有を行った。

事例の分析においてプロジェクトの実施に関わっている専門家、行政機関、NGO、コミュニティ組織、研修参加者など、様々なレベルの多くのステークホルダーにインタビューを行い、「弱者への配慮」、「エンパワーメント」、「アクター間の連携」に関してどのような取り組みがなされていたか学ぶことができた。また、「人間の安全保障」の視点から見ることによって、2つの事例の中で今後どのような取り組みをすることが考えられるか、グループで議論がなされた。帰国報告会での報告にも示されたように、2つの事例を通して、「弱者への配慮」や「エンパワーメント」を促進するためには、コミュニティに対する働きかけと行政による環境作り、機会の提供の組み合わせが重要になり、このようなコミュニティのエンパワーメントと行政の保護能力の強化を進めていくためにはドナーや行政機関、NGO、民間、住民組織などのアクター間の連携を戦略的に進めていかなければならない点が認識された。また、「人間の安全保障」の視点の他にも当該社会を取り囲むマクロ環境や社会・文化的な要素も重要であるという指摘も有益であった。

NGOとJICAの職員が「人間の安全保障」という開発援助における基礎的な考え方、援助にかかわる外部者の姿勢や心構えを共有し、国内研修での議論、海外研修で現場の事例を通して議論、意見交換を行い、互いに協働・連携することにより、途上国の弱者やエンパワーメントに配慮したより良い援助や協力ができることが認識できたことは双方にとっての収穫であった。

4. 課題

海外研修では短期間に多くの関係者を訪問し、様々なレベルの関係者にインタビューを行い事例の分析や意見交換を行った。その中で特に今回はコミュニティの「エンパワーメント」、「弱者への配慮」という視点で見ていたため、住民やコミュニティに参加者の関心が向けられ、外部者としての我々がどのよう

に関わっていく必要があるかという側面での考察が若干弱くなった印象がある。

TESDA 女性センター強化プロジェクトの専門家とは海外研修出発前のテレビ会議でプロジェクトの説明と意見交換の時間をとったが、現場で専門家と議論する時間を十分に取れなかったのは残念であった。事例を分析するにあたっては、カギになるアクターから話を聞くために十分な時間を確保することや、情報の確認やフィードバックと意見交換のために 2 度目のインタビューの機会を持つことを検討しても良いと思われる。

5. さいごに

研修を受け入れてくださったプロジェクトの関係者の皆様、JICA 事務所、NGO、カプニタン村のホストファミリーの皆様には本当にお世話になった。多くの質問にも関わらず、率直に対応してくださったことに、深く感謝している。

2. 海外研修の概要

1. 研修日程

月 日	時 間	内 容
11月21日(月)	9:30-9:45 10:00-11:00 11:00-12:30 13:00-	オリエンテーション・渡航手続 NGO 案件訪問先について JICA 案件訪問先について(JICA-Net) 昼食 調査準備 夕食、成田へ移動
11月22日(火)	8:00 9:40 13:30 16:00	ホテル出発 成田発(JAL741) マニラ着 JICA フィリピン事務所訪問 NGO-JICA ジャパンデスク見学 TESDA 専門家による説明
11月23日(水)	9:30 12:00 13:00 15:00-17:00	TESDA 女性センター訪問 センター食堂にて昼食 元研修生インタビュー NGO「DAWN」訪問 JICA 事務所にて調査結果まとめ
11月24日(木)	9:00-11:00 11:00-13:00	パヤタスにて活動中のNGO(ICAN及びSALT)を訪問、 フィリピン社会背景理解 JICA 事務所にて調査結果のまとめ
11月25日(金)	12:00	マニラ市内 PRRM 事務所訪問 昼食 フェリー乗船、草の根援助運動(P2)プロジェクト現場へ 移動 PRRM バターン事務所 カプニタン村訪問、ホームステイ
11月26日(土)	4:00-7:00 7:00-8:00 8:30-12:00 13:30-17:30	出漁体験 ホームステイ先にて朝食 コミュニティ訪問・インタビュー等 昼食、Bantay Dagat 事務所訪問 SUGPO, Ganap メンバーへのインタビュー等 パラング市へ移動 ホテル着
11月27日(日)	7:30-10:30 11:00-12:30	オリオン町町長・町会議員にインタビュー SUGPO 事務所訪問 フェリー乗船、マニラ着 ホテル着 NGO 側調査結果まとめ
11月28日(月)	9:30 14:50 19:50	JICA フィリピン事務所にて研修報告会 空港へ 昼食 マニラ発(JAL742) 成田着 国総研へ移動
11月29日(火)	9:30-12:00 12:00-13:00 13:00-16:00	帰国報告会準備 昼食 帰国報告会

2. 参加者・同行者

【NGO】(50音順)

	氏名	所属団体	部署/担当業務
1	池田 晶子	特定非営利活動法人 21世紀協会	管理運営、企画立案 他
2	色平 哲郎	佐久地域国際連帯市民の会・アイザック (ISSAC)	事務局長
3	橋場 美奈	特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会	ODA・NGO、NGO 間の連携促進、アフリカ理解促進事業
4	船橋 周	財団法人 ジョイセフ (家族計画国際協力財団)	ミャンマー及びアフリカにおけるリプロダクティブヘルス、HIV/エイズ対策担当
5	古澤 真理子	社団法人 日本ユネスコ協会連盟	世界寺子屋運動
6	森 ちえろ	特定非営利活動法人 草の根援助運動	フィリピン奨学金プロジェクト
7	渡辺 直子	特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター	南アフリカ事業

【JICA】

	氏名	所属部署	担当業務
1	飯塚 健一郎	中東・欧州部アフガニスタン支援チーム	アフガニスタンへの専門家派遣、案件形成、プロジェクトの予算管理
2	岩崎 真紀子	アジア第一部管理チーム	予算管理、戦略・計画策定取りまとめ
3	神谷 祐介	アジア第一部第一グループ フォローアップチーム (ジュニア専門員)	インドネシア及び中東における技術協力プロジェクト外・無償資金協力のフォローアップ事業
4	久保 良友	青年海外協力隊事務局国内グループ 啓発・社会還元チーム	青年海外協力隊への現職参加促進と帰国後のキャリアサポート
5	渋谷 優子	農村開発部第一グループ 水田地帯第三チーム (ジュニア専門員)	バングラデシュの技術協力プロジェクト及びスリランカの各種案件
6	神保 尚美	東京国際センター連携促進グループ 業務チーム	草の根技術協力・自治体連携事業
7	西村 拓	地球環境部第一グループ 森林保全第二チーム	アフリカ・中南米における森林保全プロジェクト
8	柳川 伸二	総務部総務グループ 業績評価チーム	業務実績報告書作成、外務省との連絡・調整

【同行者】

	氏名	役割	所属
1	武田 長久	海外研修コースリーダー	JICA 国際協力専門員
2	古澤 めい	検討委員	特定非営利活動法人 草の根援助運動 事務局次長
3	桜井 雅彦	取材	JICA プラザ 映像担当
4	松久 逸平	事務局	JICA 国際協力総合研修所人材養成グループ NGO・自治体支援チーム

3. 訪問プロジェクトの概要

1. JICA プロジェクト
「TESDA 女性センター強化プロジェクト」
 - (1) 案件概要表・案件情報
 - (2) 事業事前評価表
2. NGO プロジェクト
草の根援助運動「マニラ湾漁民による沿岸資源管理プログラム」
3. 参加者による訪問案件説明用パワーポイント



TESDA 女性センターにて

漁村の子どもたちへのインタビュー



技術協力プロジェクト

2004年03月23日現在

在外事務所 フィリピン事務所
 本部/国内機関 社会開発部-第一グループ(社会開発)-ガバナンス・ジェンダーチーム

案件概要表

案件名	(和)TESDA女性センター強化プロジェクト (英)Project on Gender Responsive Employability (Wage and Self) and Training
対象国名	フィリピン
分野課題	ジェンダー主流化・WID-ジェンダーと開発
プロジェクトサイト	マニラ
署名日(実施合意)	2004/02/12
協力期間	2004年02月 ~ 2007年02月
相手国機関名	(和)技術教育技能開発庁管轄下の女性センター
相手国機関名	(英)TESDA Technical Education and Skills Development Authority TWC, TESDA Women's Center

プロジェクト概要
背景

フィリピン国政府は、1995年に「ジェンダー配慮開発計画(Philippine Plan for Gender-responsive Development 1995-2025)」を策定し、中期開発計画等にGAD(Gender & Development)の視点を導入し、女性の地位と福祉を向上させることとしている。しかし現実には、女性の就労機会は限られ、所得や社会階層によって女性の社会進出の意識や度合いが異なる等課題が多いとされている。かかる状況の中、女性の経済力の強化のために、女性職業分野のニーズに即した技能向上を図るための無償資金協力を要請し、我が国は女性の社会・経済的地位の向上を目的として、女性を対象とした職業訓練、調査研究、啓発のためのセンター(女性職業訓練センター)の建設及び訓練機材等の整備を行う無償資金協力(1997-1998)を実施した。1998年のセンター開所後、「女性の地位向上・調査研究・啓発」、「センター運営・管理」、「女性の地位向上」、「技能訓練計画」の分野の長期専門家が同センターに派遣され、技術指導にあたった。2004年2月現在では、「ジェンダーと開発及び訓練プログラム開発」、「起業開発支援」の分野の長期専門家が2名派遣されている。

同センターでは、開所以来、9分野(自動車整備、製陶、手工芸、電子機器、食品加工、服飾、ホテル・レストラン、宝飾、金属・溶接)12コースの職業訓練を展開し、指導員養成訓練、技能向上訓練および起業研修コースを実施してきた。また、同センターでは、女性の経済活動や労働状況等に係る調査研究、および各種広報・啓発活動を行ってきた。

2002年には、同センターの中期計画(TESDA Women's Center Medium Term Directions, 2002-2005)が策定され、その中で訓練の直接提供者としてだけでなく、調査研究機能および起業支援機能をさらに強化し、関連諸機関とのネットワーク機能を持つことで、フィリピンの女性の経済的エンパワメントのための拠点となることを目標として掲げている。しかし、同センターの調査研究および啓発活動は女性の経済的エンパワメントに繋がるような仕組みが未だ十分でないため、かかる目標を達成するための包括的で実効性のある女性センター機能強化への支援が求められている。そこで、フィリピン国政府は日本に対し、同センターが強化されるように、技術協力プロジェクトを要請した。

上位目標 TWCが訓練、調査研究、政策・施策提言を通じて、女性の経済的エンパワメントに影響を与える拠点としての機能を強化する。

プロジェクト目標 TWCの訓練、調査研究、啓発の包括的な実施を通じて、TWCで訓練または研修を受けた女性の就業能力が向上する。

成果

- 1 TWCのスタッフおよびTESDAジェンダー担当者のジェンダー配慮に関する意識・能力が向上する。
- 2 TWCの訓練コースが、ジェンダーの視点にたつて、女性の就業能力向上のために改善される。
- 3 女性の就業(就職と起業)支援のためのワンストップ・サービス(KKOSS)が強化される。
- 4 TWCの女性の経済的エンパワメントに関する政策・施策提言、情報発信およびネットワークの機能が強化される。

コンサルタント名	グローバルリンクマネージメント株式会社		
調査団等派遣	調査団種別	開始	終了
	事前評価	2003/09/21	2003/09/30
	終了時評価	2006/08/15	2006/08/25
投入実績	プロジェクト専門家2名(「チーフアドバイザー/ジェンダー主流化と起業開発支援」、「業務調整/ジェンダー配慮の能力開発」)		
実施体制			
(1)現地実施体制	TESDA女性センター		
関連する援助活動			
(1)我が国の援助活動	<ul style="list-style-type: none"> ・無償資金協力「女性職業訓練センター建設計画」(1997-1998) ・個別専門家派遣「女性センター運営・管理」(1998.3.-2000.3.) <ul style="list-style-type: none"> 「女性の地位向上」(2000.4.-2001.3.) 「技能訓練計画」(1999.6.-2001.6.) 「ジェンダーと開発および訓練プログラム開発」(2002.4.-2004.4.) 「起業開発支援」(2003.5.-2005.5) ・第三国研修「職業訓練におけるジェンダー配慮」(1999年度-2003年度): <ul style="list-style-type: none"> ASEAN諸国における職業教育技術訓練へのジェンダー配慮へのジェンダー配慮を目的に5回開催。 ・国別WID情報整備調査(国際協力事業団 企画・評価部)(2002.11.) ・フィリピン国ジェンダー分野基礎調査(2004.2.-2004.5) 		
(2)他ドナー等の援助活動	<ul style="list-style-type: none"> ・UNDP(日本WID基金)「経済的エンパワメントのための戦略的支援メカニズムを通じてフィリピン女性の進出を図るプログラム」調査研究。 ・アジア開発銀行「Technical Education and Skills Development Project」(2001-2006) 		

- 活動
- 1-1 ジェンダーの視点にたつて、TESDA女性センタースタッフとTESDAジェンダー担当者の能力開発ニーズ調査が年1回、実施される。
- 1-2 TWCスタッフのための能力開発計画が作成され、年1回、改定される
- 1-3 能力開発計画に基づき、研修・ワークショップが行われる。
- 1-4 研修後に、業務改善のための報告会を開催する。
- 1-5 TESDAジェンダー担当者に対し、ジェンダー配慮に関する研修・ワークショップをGADCと調整し、実施する。
- 2-1ジェンダーの視点から訓練コースを改善するための調査を実施する。
- 2-2調査結果を踏まえ、既存の就業訓練コースの内容をジェンダーの視点から改善する。
- 2-3訓練コースの運営管理・進捗管理を改善し、システム化する。
- 2-4訓練教材を見直し、改善する。
- 2-5訓練分野・コースを改廃する。
- 2-6見直した訓練分野・コースのモニタリング・評価を実施する。
- 2-7訓練分野・コースの見直し、改善、再構成の報告書を作成する。
- 3-1起業に役立つビジネス情報を収集、作成、発信する。
- 3-2 TWC修了生、ワンストップサービス利用者等を対象としたニーズ調査を行い、KKOSS3年計画を策定する。
- 3-3ビジネスカウンセラーを養成する。
- 3-4ビジネスカウンセリングサービスを提供する。
- 3-5実施したビジネスカウンセリングの記録を作成する。
- 3-6女性起業家便覧を作成する。
- 3-7訓練コース訓練生に、起業に役立つ研修を行う。
- 3-8 KKOSS活動改善のためのモニタリング・評価を行う。
- 4-1 政策・施策提言・情報発信に資するための調査研究計画を作成する。
- 4-2調査研究を実施する。
- 4-3調査研究の結果を諮問委員会(CAC, Center Advisory Committee)の議題とする。
- 4-4女性の就業訓練におけるジェンダー主流化に関する調査・研究を継続できる仕組みを、CAC等を通じてつくる。
- 4-5 女性の就業訓練およびジェンダー主流化に関するデータベースを整備する。
- 4-6 ライブラリーを女性の就業訓練およびジェンダー主流化の視点から、内部及び外部機関が有効に活用できるように見直す
- 4-7ウェブサイトを作成し、定期的に更新する。
- 4-8就業女性の成功事例とりまとめる。
- 4-9ニューズレターを隔月に発行する。
- 4-10 就業支援のための組織・機関とのネットワークを強化する。
- 4-11調査研究のための組織・機関とのネットワークを強化する。
- 4-12国際会議を実施し、アジア太平洋地域におけるネットワークを拡大する。
- 4-13第三国研修「就業訓練におけるジェンダー主流化」を実施する。

投入

日本側投入

専門家派遣:
 長期専門家:2人(ジェンダー配慮の能力開発、ジェンダー主流化と起業開発支援)
 短期専門家:3名程度/年(商品開発とデザイン、起業継続支援、拠点施設としての情報・統計整、その他必要に応じて派遣)
 研修員受入:年間2名程度(ジェンダー主流化と女性の経済的エンパワメント、女性の経済的エンパワメントの拠点施設における情報収集・加工・提供、等)
 供与機材:必要に応じて検討。
 現地業務費・現地コンサルタントによる調査、コース改善に必要な経費、KKOSS強化のための経費、国際会議開催費等。
 第三国研修:「女性の職業訓練におけるジェンダー主流化 Part II」
 1回/年

相手国側投入 外部条件

カウンターパート人件費(33名)、専門家執務室、センター運営費
 ・フィリピンの経済状況が極端に悪化しない。
 ・フィリピンの女性の経済的エンパワメントに関する政策が後退しない。

事業事前評価表（技術協力プロジェクト）

作成日：平成16年2月9日

担当部・課：社会開発協力部社会開発協力1課

<p>1. 案件名：（和文）TESDA 女性センター強化プロジェクト （英文）Project on Gender Responsive Employability (wage and self) and Training</p>
<p>2. 協力概要</p> <p>(1) 協力内容 フィリピン国における女性の経済的エンパワメントを目的に、女性センター（TWC:TESDA Women's Center）におけるスタッフの能力向上、訓練の改善、起業支援、政策・施策提言の強化を行う。</p> <p>(2) 協力期間：2004年2月16日～2007年2月15日（3年間）</p> <p>(3) 協力総額（日本側）：約 1億3,000万円</p> <p>(4) 協力相手先機関： ・プロジェクト監督機関：労働雇用省（DOLE: Department of Labor and Employment）の傘下にある技術教育技能開発庁（TESDA: Technical Education and Skills Development Authority） ・プロジェクト実施機関：TESDA 女性センター（TWC: TESDA Women's Center）</p> <p>(5) 国内協力機関：JICA 直営</p> <p>(6) 裨益対象者及び規模：TWC スタッフ 33人、TESDA ジェンダー担当者 29人、TWC の利用者 10,000人/年、TESDA 関係機関（企業、NGO、省庁等）約 150 機関 （*各数値は、2004年1月現在の参考数値。）</p>
<p>3. 協力の必要性・位置付け</p> <p>(1) 現状及び問題点 フィリピン国政府は、1995年に「ジェンダー配慮開発計画（Philippine Plan for Gender-responsive Development:1995-2025）」を策定し、中期開発計画等に GAD(Gender & Development)の視点を導入し、女性の地位と福祉を向上させることとしている。しかし現実には、女性の就労機会は限られ、所得や社会階層によって女性の社会進出の意識や度合いが異なる等課題が多いとされている。かかる状況の中、女性の経済力の強化のために、女性職業分野のニーズに即した技能向上を図るための無償資金協力を要請し、我が国は女性の社会・経済的地位の向上を目的として、女性を対象とした職業訓練、調査研究、啓発のためのセンター（女性職業訓練センター）の建設及び訓練機材等の整備を行う無償資金協力（1997-1998）を実施した。</p> <p>1998年のセンター開所後、「女性の地位向上・調査研究・啓発」、「センター運営・管理」、「女性の地位向上」、「技能訓練計画」の分野の長期専門家が同センターに派遣され、技術指導にあたった。2004年2月現在では、「ジェンダーと開発及び訓練プログラム開発」、「起業開発支援」の分野の長期専門家が2名派遣されている。</p> <p>同センターでは、開所以来、9分野（自動車整備、製陶、手工芸、電子機器、食品加工、服飾、ホテル・レストラン、宝飾、金属・溶接）12コースの職業訓練を展開し、指導員養成訓練、技能向上訓練および起業研修コースを実施してきた。また、同センターでは、女性の経済活動や労働状況等に係る調査研究、および各種広報・啓発活動を行ってきた。</p> <p>2002年には、同センターの中期計画（TESDA Women's Center Medium Term Directions:2002-2005）が策定され、その中で訓練の直接提供者としてだけでなく、調査研究機能および起業支援機能をさらに強化し、関連諸機関とのネットワーク機能を持つことで、フィリピンの女性の経済的エンパワメントのための拠点となることを目標として掲げている。</p>

しかし、同センターの調査研究および啓発活動は女性の経済的エンパワメントに繋がるような仕組みが未だ十分でないため、かかる目標を達成するための包括的で実効性のある女性センター機能強化への支援が求められている。そこで、フィリピン国政府は日本に対し、同センターが強化されるように、技術協力プロジェクトを要請した。

(2) 相手国政府の国家政策上の位置付け

大統領府直轄の国内機関(ナショナルマシーナリー)「フィリピン女性の役割委員会」(NCRFW: National Commission on the Role of Filipino Women)が調整する「ジェンダー配慮開発計画(1995-2025)」を促進するための「女性のための枠組み計画」(Framework Plan for Women)において、「女性の経済的エンパワメント」が重点目的として位置づけられている。「ジェンダー配慮開発計画」は、女性の非伝統産業への就業機会への拡大、男女雇用機会均等化、男女同一労働同一賃金の実施等による女性の社会的・経済的向上を重点課題としている。

また、「新中期開発計画(2001-2004)」においても、女性の社会的・経済的向上支援の重要性が述べられている。

(3) 我が国援助政策との関連、JICA 国別事業実施計画上の位置付け(プログラムにおける位置付け)

国別事業実施計画において、「女性の経済力強化」は、フィリピン国における援助重点分野のうち、基礎的生活条件の改善の中の「社会的弱者支援」に位置づけられている。

4. 協力の枠組み

[主な項目]

(1) 協力の目標(アウトカム)

① 協力終了時の達成目標(プロジェクト目標)

TWC の訓練、調査研究、啓発の包括的な実施を通じて、TWC で訓練または研修を受けた女性の就業能力が向上する。

(指標・目標値)

1. プロジェクト終了時まで、就業準備訓練コース修了生の資格取得率が80%に達する。
2. プロジェクト終了時まで、就業準備訓練コース修了生の就業率が60%に達する
3. プロジェクト終了時まで、起業研修コース修了生の起業率が35%に達する。

② 協力終了後に達成が期待される目標(上位目標)

TWC が訓練、調査研究、政策・施策提言を通じて、女性の経済的エンパワメントに影響を与える拠点としての機能を強化する。

(指標・目標値)

1. プロジェクト終了後3年以内に実施された女性の経済的エンパワメントに関する政策・施策の数。
2. TWC によって発信された女性の経済的エンパワメントに関する政策・施策提言の数。
3. TWC によって発信された女性の経済的エンパワメントに関する情報提供の数と種類。

(2) 活動及びその成果(アウトプット)

(成果)

1. TWC のスタッフおよび TESDA ジェンダー担当者のジェンダー配慮に関する意識・能力が向上する。

(活動)

- 1-1 TWC スタッフのための能力開発計画が作成され、年1回、改定される
- 1-2 能力開発計画に基づき、研修・ワークショップが行われる。
- 1-3 TESDA ジェンダー担当者に対し、ジェンダー配慮に関する研修・ワークショップを GADC と調整し、実施する。

(指標)

- 1-1 10人以上のスタッフが毎年、能力開発計画に基づく研修を受け、ジェンダー配慮に関する理解を深める。
- 1-2 TESDA ジェンダー担当者が毎年、ニーズ調査に基づいて研修を受ける。

(成果)

2. TWC の訓練コースが、ジェンダーの視点にたつて、女性の就業能力向上のために改善される。

(活動)

- 2-1 調査結果を踏まえ、既存の就業訓練コースの内容をジェンダーの視点から改善する。
- 2-2 訓練コースの運営管理・進捗管理を改善し、システム化する。
- 2-3 訓練分野・コースを改廃する。
- 2-4 訓練分野・コースの見直し、改善、再構成の報告書を作成する。

(指標)

- 2-1 1コースにつき、每期、ニーズ調査に基づき改善がなされる。
- 2-2 訓練コース運営マニュアルが作成され、毎年、改善される。
- 2-3 訓練内容が改善され、より多くの訓練生の OJT 先および修了生の就職先の企業・事業所数が増加する。

(成果)

3. 女性の就業(就職と起業)支援のためのワンストップ・サービス(KKOSS)が強化される。

(活動)

- 3-1 起業に役立つビジネス情報を収集、作成、発信する。
- 3-2 TWC 修了生、ワンストップサービス利用者等を対象としたニーズ調査を行い、KKOSS3年計画を策定する。
- 3-3 ビジネスカウンセラーを養成する。
- 3-4 女性起業家便覧を作成する。
- 3-5 訓練コース訓練生に、起業に役立つ研修を行う。

(指標)

- 3-1 ビジネスカウンセリングが、プロジェクト終了時まで3,000件以上実施される。
- 3-2 カウンセリング・ケーススタディレポートが毎年、2回作成される。
- 3-3 起業研修コース修了生とKKOSSの利用者が増加する。

(成果)

4. TWC の女性の経済的エンパワメントに関する政策・施策提言、情報発信およびネットワ

ークの機能が強化される。

(活動)

- 4-1 政策・施策提言・情報発信に資するための調査研究計画を作成する。
- 4-2 調査研究を実施する。
- 4-3 女性の就業訓練におけるジェンダー主流化に関する調査・研究を継続できる仕組みを、CAC等を通じてつくる。

- 4-4 女性の就業訓練およびジェンダー主流化に関するデータベースを整備する。
- 4-5 ライブラリーを女性の就業訓練およびジェンダー主流化の視点から、内部及び外部機関が有効に活用できるように見直す
- 4-6 就業女性の成功事例とりまとめる。
- 4-7 就業支援のための組織・機関とのネットワークを強化する。
- 4-8 第三国研修「就業訓練におけるジェンダー主流化」を実施する。

(指標)

- 4-1 プロジェクト終了時まで、3件以上の政策・施策がCACに提言される。
- 4-2 ライブラリーの利用数(年間約2,800件・2003年現在)が、プロジェクト終了時までに2倍以上に増加する。
- 4-3 訓練コースへの協力企業・事業所数(約80件、2003年現在)が、毎年15%増加する。

(3) 投入(インプット)

① 日本側(総額 約 1億3,000万円)

専門家派遣:

長期専門家: 2人(ジェンダー配慮の能力開発、ジェンダー主流化と起業開発支援)

短期専門家: 3名程度/年(商品開発とデザイン、起業継続支援、拠点施設としての情報・統計整、その他必要に応じて派遣)

研修員受入: 年間2名程度(ジェンダー主流化と女性の経済的エンパワメント、女性の経済的エンパワメントの拠点施設における情報収集・加工・提供、等)

供与機材: 必要に応じて検討。

現地業務費、現地コンサルタントによる調査、コース改善に必要な経費、KKOSS強化のための経費、国際会議開催費等。

第三国研修: 「女性の職業訓練におけるジェンダー主流化 Part II」

1回/年

② フィリピン国側

カウンターパート人件費(33名)、専門家執務室、センター運営費

(4) 外部要因(満たされるべき外部条件)

- ・ フィリピンの経済状況が極端に悪化しない。
- ・ フィリピンの女性の経済的エンパワメントに関する政策が後退しない。

5. 評価5項目による評価結果

(1) 妥当性

本案件は以下の理由から妥当性が高いと判断できる。

- ・ 「3. 協力の必要性・位置付け」で述べたように、本案件は、女性の非伝統産業への就業機会への拡大、男女雇用機会均等化、男女同一職種同一賃金の実施等による女性の社会的・経済的向上を目指しているフィリピンの「ジェンダー配慮開発計画(Philippine Plan for Gender-responsive Development: 1995-2025)」、及び女性の社会的・経済的向上支援を掲げている「新中期開発計画(2001-2004)」に合致している。

- ・ フィリピン国に対する JICA の国別事業実施計画においても、「女性の経済力強化」は、フィリピン国における援助重点分野のうち、基礎的生活条件の改善の中の「社会的弱者支援」に位置づけられている。
- ・ 1998 年の TWC 開所後、6 名の長期専門家が派遣されてきており（そのうち 2004 年 2 月現在では、「ジェンダーと開発及び訓練プログラム開発」、「起業開発支援」分野の長期専門家が派遣中）、これまで個別に行われてきた協力が包括的な協力計画を策定し、その下で協力を行うことは、TWC 機能の強化、訓練を受けた女性の就職・起業率が上昇し就業能力の向上を一層加速させるものと期待される。

(2) 有効性

本案件は、以下の理由から有効性が見込まれる。

- ・ プロジェクト目標を達成するには、訓練、調査研究、啓発の 3 つが強化され、包括的に機能する必要があり、プロジェクトの 4 つの成果を達成するための活動を行う。成果 1 により研修やワークショップを通して TWC 及び TESDA ジェンダー担当者の組織としてのジェンダー主流化の意識や必要な能力が向上し、成果 2 により訓練コースが改善されることにより就業率が上昇する。成果 3 で KKOSS（ワンストップサービス：女性の起業のための情報・ビジネスコンサルティング提供施設）が強化されることにより、起業家支援が強化され、ビジネスコンサルティングの実績は調査研究の基礎データとなる。TWC は、成果 1 から 3 の活動実績から、成果 4 の活動を通じ現場の生の情報やデータを収集・分析・加工し、データベースを構築しながら調査研究を行う。したがって、その過程で明らかとなった女性の就職・起業を阻む要因・問題を解決するための政策・施策を提言し、情報発信、ネットワーク機能を強化することで、女性の経済的エンパワメント促進のための環境が整い、プロジェクト目標の達成に結びつくものと期待できる。

(3) 効率性

本案件は、以下の理由から効率的な実施が見込める。

- ・ TWC の開所以来 2004 年 1 月現在までに 6 人の専門家を TWC に派遣し、各専門家のカウンターパートも本邦で研修を受け入れ、第三国研修も実施してきており、こうした協力の蓄積を、本プロジェクトが活用することができる。
- ・ TWC は 1998 年に女性職業訓練センターとして日本の無償資金協力事業により開設されており、TWC の施設及び機材を可能な限り使うことを予定しているため、比較的低コストで実施すると共に、無償資金協力事業の効果も高めることになるため効率性は高い。

(4) インパクト

本案件のインパクトは以下のように予測できる。

- ・ 上位目標に関しては、プロジェクト終了時までには TWC がジェンダーの視点から改善・強化された訓練及び研修事業、起業支援事業が軌道に乗り、そこから得られた情報を基に調査研究が行えるまでに TWC が強化されるのであれば、プロジェクト終了後も継続的に、女性の経済的エンパワメントに影響を与えるような政策・施策提言を行うことができる。また、関係機関とのネットワークも構築されることから、TWC が女性の経済的エンパワメントに影響を与える拠点としての機能することが期待できる。
- ・ 本プロジェクトを実施することにより、フィリピンにおける女性の経済的エンパワメントに関し、TWC の位置付けが明確になり、NCRFW（フィリピン女性の役割委員会）等の関係機関において女性の経済的エンパワメントのための政策の策定及び実施が促進されることが期待できる。
- ・ 本プロジェクトにおいて、女性の起業に関する国際・国内会議や KKOSS を通じて女性の起業を紹介することにより、それに刺激を受け、参考にして起業を試みる事例が増すことが期待される。
- ・ 負のインパクトは、事前評価段階では見出せなかった。

(5) 自立発展性

① TWC 職員の定着率

TWC は国の機関であり、現在の職員は一般から公募採用された人が多く、仕事にやりがいを感じている人が多い。過去の退職者数も少なく、その離職理由を調べたところ、配偶者の転勤等やむを得ない理由であった。さらに、同センターの人員費は近年一定金額を保っており、この状態を維持することができれば、人員費の削減は無いと考えられ、職員の離職率は低いと考えられることから、自立発展性が期待できる。

② 国際的ネットワークの構築

本プロジェクトにおいては、ジェンダーの視点から TWC の職員の能力開発を行うが、「フ」国はこれまでカンボジアやインドネシア等の周辺国を対象とした第三国研修「職業訓練におけるジェンダー配慮」を実施してきており、2003 年度で 5 回目を迎えた。これらの第三国研修を通じて築いた各国のジェンダー担当者との面識を活用し、各国のフォーカルポイント同士をネットワーク化することになっているので、プロジェクト終了後においても、TWC の活動が継続的に発展することが期待できる。

③ 調査研究・維持管理費用

プロジェクト協力期間中は、プロジェクトの中でコースの改善や調査研究が行われるが、協力終了後は TWC 自身が経費負担を含めて対応しなければ、プロジェクトにより達成された目標を持続することができない。したがって、外部機関（大学や地方自治体等）との連携、TWC の訓練・研修の有料化及び訓練生の作品の販売等、活動費用を捻出できるしくみを、プロジェクト期間中に作っておくことで、自立発展性が期待できる。

6. 貧困・ジェンダー・環境等への配慮

ジェンダー案件である本プロジェクトを実施することにより、女性の経済的エンパワメントを促進し、女性が就職・起業することにより収入向上を通じて貧困から脱却できる効果が期待できる。また、女性の就職率が高まることにより、企業による女性の積極的な活用が見込まれ、女性が社会で活躍することにより、地位の向上を図ることができる。環境に与えるマイナスの影響は特にない。

7. 過去の類似案件からの教訓の活用

なし。

8. 今後の評価計画

・フィリピンに対するジェンダー分野基礎調査：2004 年 3 月頃 実施予定

・終了時評価：2006 年 7 月頃 実施予定

・事後評価：協力終了後 3 年後を目途に実施予定

* プロジェクト協力期間が 3 年のため、中間評価は行わない。但し、必要に応じ、運営指導調査を行う。

マニラ湾漁民による沿岸資源管理プログラム

(THE MANILA BAY COMMUNITY-BASED COASTAL RESOURCES MANAGEMENT PROGRAM)

1. 背景

2003年の草の根援助運動による聞き取り調査によれば、本プロジェクト実施予定区域のひとつであるカビテ州サンタ・メルセデス村の零細漁民の平均月収は2,000ペソであった。これだけに一世帯6人が依存していると仮定して計算すれば一人あたりの月収は300ペソ強となり、これは国連の示す貧困ライン1日1ドル(月収30ドル、約1600ペソ)にも遠く及ばない。また、一人あたり年収は4,000ペソとなるが、これはフィリピン国家統計局が示す2000年のフィリピン平均年収144,039ペソの実に三十分の一となる。実際には漁民たちは様々な方法により別の収入を得る努力をしているが、いずれにしてもその生活は非常に苦しい。

その最大の原因は、マニラ湾の漁業資源の減少に求めることができる。

1950年代までマニラ湾は自然資源に富んだ豊かで美しい海であったが、60年代よりマニラ首都圏の生活污水および沿岸地域の工業廃水により汚染が始まり、現在までその水質悪化は深刻化の一途をたどっている。自然破壊も深刻で、1995年から96年にかけて行われたフィリピン農業省および環境水産資源局の調査によれば、沿岸のマングローブ林は40年間で45%あまりが破壊され養殖池に転換されてしまった。

こうした環境の悪化に加え、大型商業漁船によるトロール漁を主因とする海底環境の破壊、ダイナマイト漁をはじめとする不法漁法の横行による乱獲によって、魚資源そのものも減少している。90年代に入って導入された商業漁船によるスーパーライトという大光量集光漁法も、この傾向に拍車をかけている。湾内でのスーパーライト操業は本来違法であるのだが、99年現在で944隻が自由に操業している状態である。その結果、上述の調査によれば、単位あたり魚類生息量は47年当時の四分の一にまで減少している。

こうした漁業環境の悪化により、マニラ湾沿岸地域に住む漁民たちは、その日の生活の糧を得るだけで精一杯という生活を余儀なくされている。荒天により出漁できない状態が続くと文字通り食うや食わずの状態になり、BHNを満たすこともできない状況に追い込まれる。そのためやむなく現金収入を求めて家族の一員が国内外に出稼ぎに出たり、一家でマニラ首都圏に流出したりせざるを得なくなっている。将来を託したい次世代教育も難しく、サンタ・メルセデス村では、2003年の時点で小学校卒業率は約50%、ハイスクール進学率は30%程度であった。

2. プロジェクトの目的・内容

CB-CRM

コミュニティベースの沿岸資源管理プログラム(Community Based Coastal Resource Management)は、漁民と沿岸コミュニティが、沿岸資源を自ら管理して資源の利用についての決定ができるようになること、沿岸資源再生・保護・管理によってエコロジカルに持続可能な状態を追求できるようにすること、を目的とした、SRDDP（後述）の一部プロジェクト。その実施エレメントは、漁民による資源管理メカニズムの設定、沿岸保護能力の構築、沿岸資源再生プロジェクトのデモンストレーション、それらをサポートするためのアドボカシーとなっている。

<具体的な内容>

- 1 住民組織結成と強化
- 2 漁民の意識向上と情報提供
- 3 住民組織によるマングローブ植林
- 4 住民による資源調査
- 5 禁漁区の設定、維持管理
- 6 住民による不法漁と密漁のパトロール
- 7 代替的な生計手段の検討・導入
- 8 マニラ湾の環境保護に関する政策提言活動
- 9 日本国内での情報提供と開発教育の実施

プロジェクト実施地域は、マニラ湾沿岸 4 州（バターン、パンパンガ、ブラカン、カビテ）にわたる。

3. 事例

バターン州オリオン町

オリオン町はバターン州南部の沿岸にある。人口は、43,000 人、漁民人口は 1,400 世帯 8,000 人。他は農業が主で、畜産も行われている。

PRRM は 88 年から介入開始、町レベルの漁民組織「オリオン町漁民組織連合（Samahan at Ugnayan sa Pampangisdaan ng Orion -SUGPO）」結成を支援。1994 年、SUGPO と地方自治体の担当者による資源管理会議（Resource Management Council・RMC）の設立、禁漁区(fish sanctuary)および操業制限区域(fish reserve)の設定、マングローブ植林、漁民によるパトロールの実施、および漁民による漁業収入と資源に関するモニタリングといった一連のプログラムを開始した。1996 年、SUGPO は州内組織であるバターン地方零細漁民連合(the Sagip Likas Yamang-Dagat ng Bataan・SALBA)に加盟、さらに 1 年後には PRRM の主導によりつくられたマニラ湾沿岸漁民連合(Kalpunan ng mga Maliliit na

Mangingisda sa Manila Bay・KALMADA-MB)というマニラ湾沿岸全域の漁民および NGO の連合組織にも加盟した。

2000年、PRRM と KALMADA-MB、ルソン零細漁民集団(Pinagkaisang Ugnayan ng maga Maliliit na mangingisda ng Luzon・PUMALU)が協力して、「マニラ湾を閉鎖せよ(Sarado 'ng Manila Bay・SMB)」というキャンペーンを開始した。これは、乱獲のひどいマニラ湾の漁業資源回復のために、マニラ湾内での商業漁船の操業禁止を求めたもの。SMBは大々的に行われ、商業漁船側のネガティブキャンペーンに会いながらも、漁民たちと NGO は各地で集会を開き、地方行政や農業省に対するロビイングを行い、短期間のうちにマニラ湾に面した 36 の町の町長のうち、バターン州オリオン、カビテ州ナイクなど 17 の町の町長の賛同を得るまでにいったが、キャンペーンに好意的だったエストラダ政権が 2001 年 1 月に崩壊したことで振り出しに戻った。しかし 2004 年 10 月、バターン州当局が取り締まりを開始、2005 年 1 月には湾内からほぼすべての商業漁船がいなくなった。

4. 現地パートナー NGO

フィリピン農村再建運動(Philippine Rural Reconstruction Movement)

1952 年発足。フク団への対抗策としてフィリピン政府も支援した。60 年代には企業等の支援も受けて、70 年にはルソンからミンダナオまでの 13 州で活動。協同組合やクレジット組合の設立支援、農業その他のトレーニングなどを行った。

マルコス戒厳令中衰退、1986年2月エドサ革命後、反政府活動家だったオラシオ・モラレス・ジュニア(Horacio Morales Jr. a.k.a Boy Morales)が再建した。1988年バターン・イフガオ・ヌエバエシハ・カマリネススル・コタバトの5州で活動を開始。92年までにはPRRMは300人の開発ワーカーを抱え、11州で活動するフィリピン最大級の NGO となり、97年には400人のワーカーと18州での展開を誇った。

1998年、モラレスはエストラダ政権の農地改革庁長官に就任、99年国会議員ウィグベルト・タニヤダ(Wigberto E. Tanada)を代表に迎え、2000年には菓子会社の寄附によるケソン市内の5階建て本部に入居した。しかし、1986年以来 PRRM を支えてきたオランダの NOVIB、ドイツのジャーマン・アグロアクション(German Agro Action・GAA)他の基金が、相次いで支援を終了。2003年3月には多くの支部を閉鎖し、残った支部もスタッフは1人か2人のみという体制に縮小した。現在は、本部スタッフも含めて80人程度という体制になっている。

5. PRRM の開発戦略

1987年、エンパワーメント—民主化—社会変革という下から上への流れを強く意識した「持続可能な農村地域開発プログラム(The Sustainable Rural District Development Program・SRDDP)」を作成した。

ひとつの SRD には、高地・中高地(midland)・低地・沿岸の4つのうち最低2つのエコ

システムを含むものとし、経済面では、製造・加工・金融・商業が適度に現存するか、あるいはその可能性が含まれるものとする。社会政治的には、クリティカル・マスが生成され、政策面でのインパクトが可能となる物理的・人口学的条件を満たすものとして、5万世帯、20万人から30万人の人口をカバーし、平均1,500平方キロの土地を想定している。このSRDにおいて、社会インフラ整備、持続可能な地域経済システムおよび基本的社会サービスシステムの構築を図るのがSRDDPである。

海外研修で訪問するマニラ湾のプロジェクトもSRDDPの実践のひとつとして実施されてきた。

訪問プロジェクトの概要

NGO－JICA相互研修 (海外研修)

フィリピン
2005.11.21～11.29



日程(前半)

- 11/21 事前研修(国内)
TESDA専門家による説明(JICA-NET)
- 11/22 JICAフィリピン事務所訪問
NGO-JICAジャパンデスク説明
- 11/23 TESDA女性センター訪問
JICA専門家・スタッフ・元研修生へ
インタビュー
DAWN訪問
- 11/24 パヤタス(ICAN、SALT)訪問

日程(後半)

- 11/25 PRRMマニラ事務所訪問
カプニタン村にてホームステイ
- 11/26 出漁体験、バターン水産学校訪問
Bantay Dagat事務所訪問
各PO(SAMACAP・SUGPO等)へ
のインタビュー
- 11/27 オリオン町長、町議会議員訪問
SUGPO/SALBA事務所訪問
- 11/28 報告会(JICAフィリピン事務所)

JICAプロジェクト (TESDA女性センター強化プロジェクト)

TESDA Technical Education and Skills
Development Authority

TWC TESDA Women's Center



プロジェクトの背景

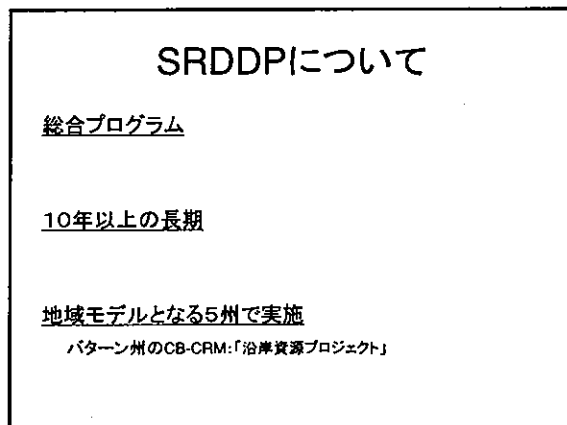
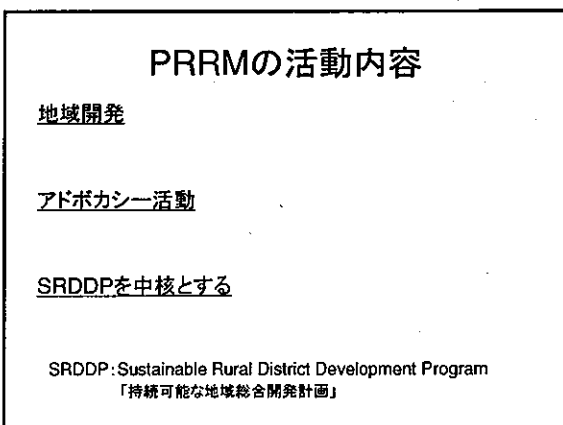
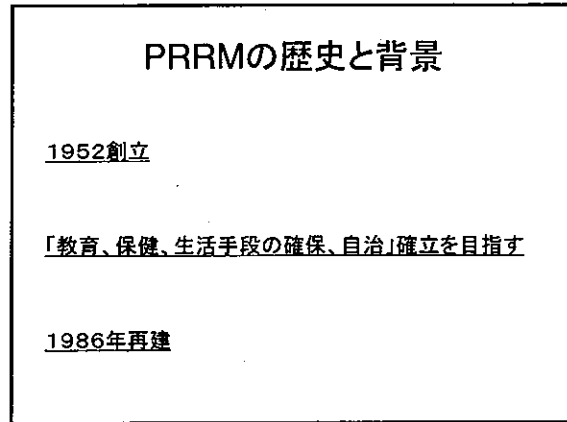
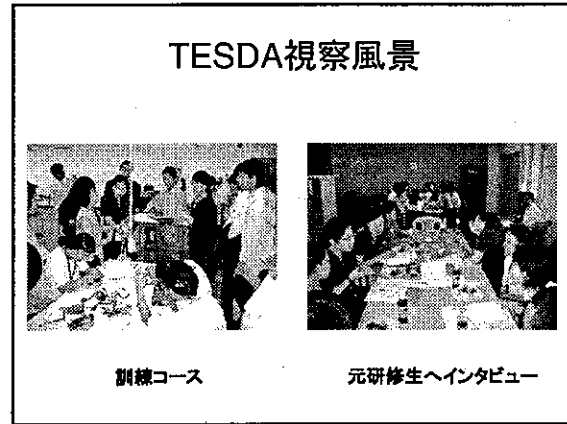
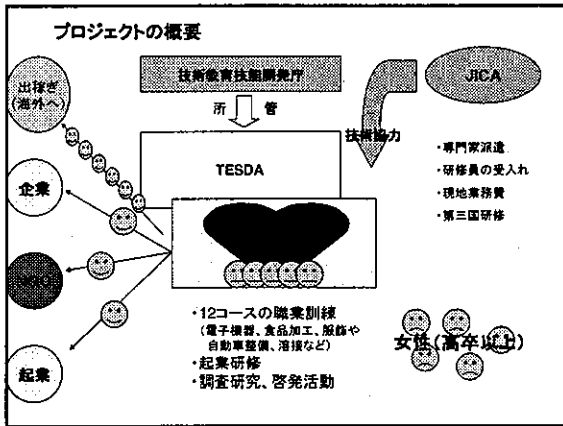
(理想)
フィリピン国における
女性の地位と福祉を向上させる。

(現実)
所得や社会階層により、
社会進出の度合いは異なっている。
(就職機会の限定)
→技術協力の必要性

プロジェクトの目的

- ①TWCの訓練を通して女性の就労機会を
向上させる。
- ②女性の就職機会を向上させるだけでなく、
起業支援機能を強化する。
- ③女性の経済的エンパワメントに関する
政策提言機能、関連機関とのネットワーク
機能を向上させる。

訪問プロジェクトの概要



訪問プロジェクトの概要

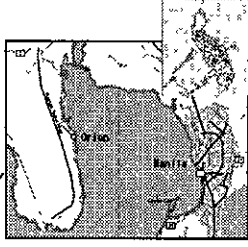
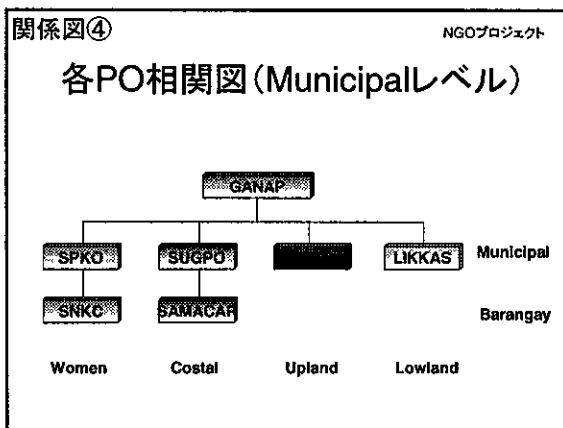
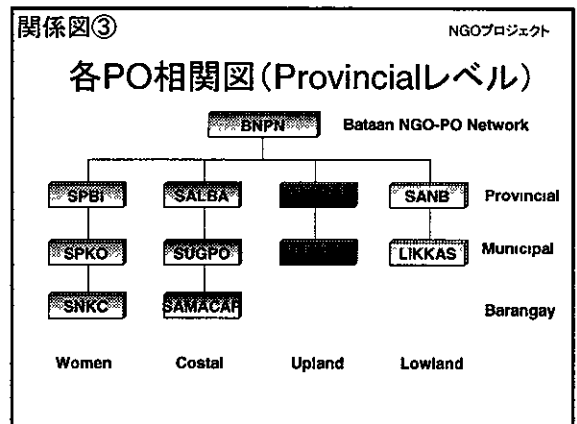
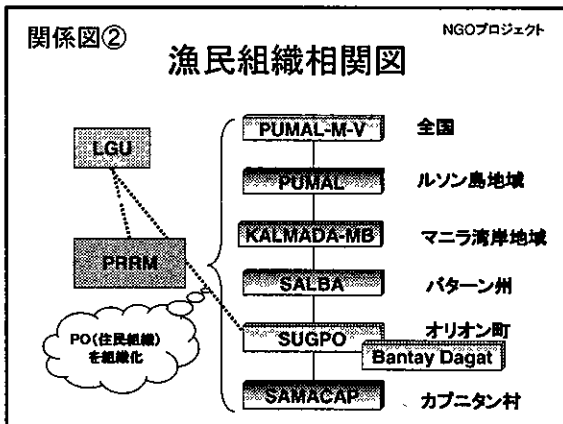
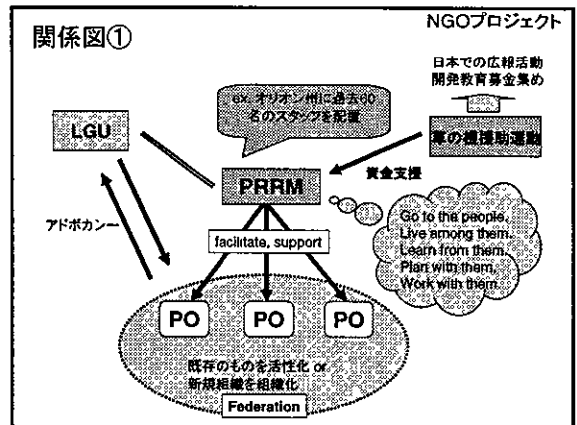
CB-CRMIについて

背景：商業漁船、ダイナマイト漁法による乱獲

オリオン町から開始

- ・フードフォーワーク、漁民組織化
- ・禁猟区の設定、パトロール
- ・マングローブ植林
- ・「マニラ湾閉鎖せよ」キャンペーン

現在、「自立期」に

- ### インタビュー先
- NGOプロジェクト
- ・ PRRMマニラ事務所
 - ・ PRRMバターン事務所
 - ・ SALBA(バターン州漁民組織)
 - ・ SUGPO(オリオン町漁民組織)
 - ・ BANTAY DAGAT(SUGPO海の番人)
 - ・ SAMACAP(カプニタン村漁民組織)
 - ・ SNKC(カプニタン村女性組織)
 - ・ YACFP(カプニタン村青年組織)
 - ・ LIKKAS(オリオン町農民組織)
 - ・ GANAP(オリオン町組織連合)
 - ・ BLUMPCE(ラティ村の生協組織)
 - ・ オリオン町長・議員

訪問プロジェクトの概要

PRRM視察風景



出漁体験



SUGPO事務所

4. 海外研修の成果

海外研修では参加者は3つのグループに分かれてインタビュー等を行い、グループ内で分析を進めた。

まとめた内容は渡航最終日にマニラの JICA フィリピン事務所にて事務所員、現地 NGO スタッフを交えて調査結果報告会を行った。その調査結果を踏まえ、帰国翌日に国際協力総合研修所にて、「人間の安全保障」を活かした協力を進めるために重要な項目や視点について、JICA として、NGO として、また両者共通に「外部者」として何をすべきか、グループごとに報告を行った。以下にその発表内容を掲載する。

海外研修調査グループ

グループ	メンバー
A	飯塚、神谷、池田、船橋、神保
B	西村、柳川、古澤、渡辺、渋谷
C	色平、久保、橋場、森、岩崎

NGO-JICA相互研修

私たちの人間の安全保障への
取り組みに向けて

Aグループ
飯塚、池田、神谷
神保、船橋

1

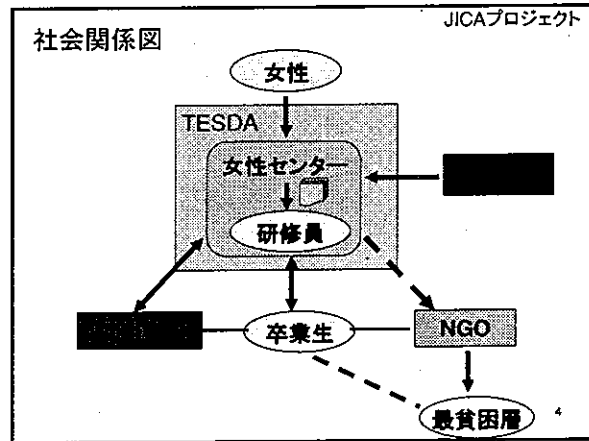
Aグループの視点

1. エンパワメントはなされているのか
2. 弱者(最貧困層)への配慮はされているのか
3. アクター間の連携はなされているのか

2


JICAプロジェクト
(TESDA)

3



JICAプロジェクト

エンパワメント



自動車整備コース


<現状>

- ・ジェンダー配慮された職業訓練コースやジェンダー講座も行っている
- ・技術支援&就職支援を行っている
- ・起業講座は行っているが、各コースには盛り込まれていない

5

JICAプロジェクト

弱者に対する配慮



パヤタスのごみの山


<現状>

- ・奨学金
- ・授業料無料
- ・マイクロクレジット利用可能
- ・基本的に訓練生は、高卒生以上しか受け入れていないため、貧しいとはいえ、最貧困層を対象としていない

6

JICAプロジェクト

アクター間の連携



DAWNで働く元訓練生

<現状>

- ・企業との連携
- ・バザー、ジョブフェア
- ・広報活動

7

JICAプロジェクト

TESDA

	現状	提言
エンパワメント	・ジェンダー配慮 (技術取得&就職支援) ・起業精神の喚起に弱み	・ジェンダー&起業精神の各コースへの意識的な盛り込み
弱者への配慮	・最貧困層へのアプローチを欠く	・社会還元を促す仕組みを意識的に
アクター間の連携	・企業との連携(就職支援)&一般の広報あり	・各セクターの戦略的強化(双方向)
マルチセクターアプローチ	・女性セクターの総合的アプローチ	・コース間の連携 ・実践現場を持つ

8

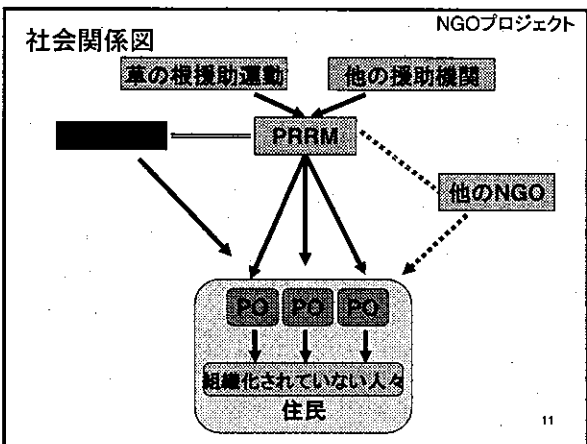
JICAとして人間の安全保障の視点を踏まえてさらにできること

- JICAはプロジェクト後のことをプロジェクトの実施中の段階においても柔軟に配慮する。
- アクター間のファシリテーションを配慮する。
- 職員の教育方法を残していく(トレーナズトレーニング)。

9


NGO プロジェクト (PRRM一草の根援助運動)

10



NGOプロジェクト

エンパワメント



SUGPO事務所


<現状>

- ・ビジョン形成(多くのPOの方向付け)
- ・具体的なアクションにつなげている。例えば、マニラ湾封鎖運動、禁漁区の設定

12

NGOプロジェクト

弱者に対する配慮



マニラ湾の海上生活者


<現状>

- Alternative livelihood (野菜作り、魚の加工等) をすすめていた
- Down Turn Riskの軽減
- 最貧困層には及んでいない

13

NGOプロジェクト

アクター間の連携



町長宅にて

<現状>

- LGU、さまざまなPO、NGOで強力な連携が行われている (CHAPTERS)
- アドボカシーの展開による条例化が実現している (例えば、禁漁区の設定)

14

NGOプロジェクト

PRRM

	現状	提言
エンパワーメント	•ビジョンの形成 方向付けと具現化	•アウトリーチへの必要性の気づきを促す
弱者への配慮	•Alternative livelihood downturn riskの軽減 •POPへのアウトリーチなし	•POにアウトリーチを促す意識的な仕組みを →活動の広がり
アクター間の連携	•LGU 各種PO、NGO同士の強力な連携	•PoPIに特化したNGOとの意識的に連携を
マルチセクターアプローチ	•様々なセクターのPOの組織化に成功	•意識的に組織アプローチを

15

草の根援助運動として人間の安全保障の視点を踏まえさらにできること

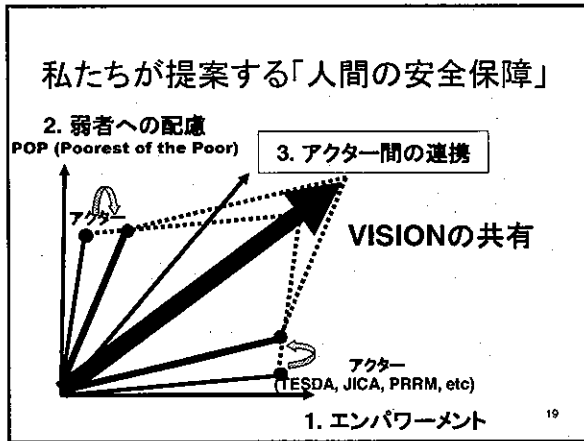
- カウンターパートに対してより弱い立場にある人々への視点を促す。
- 技術的な支援については他のNGOとの橋渡し。
- 開発教育においてもさらに弱い立場にある人々への視点を取り入れた援助の必要性を盛り込む。

16

2つの事例から気づいた人間の安全保障

17

1. 自分たちよりも弱い立場にある人々に対する気づきを促す仕組みをプロジェクトに盛り込む。
 2. 自分及び他のアクターの強みと弱みを知った上でのアクター間の戦略的連携が必要
 3. そのためには、VISIONの共有が欠かせない
- 18



今後人間の安全保障をどのように取り組んでいくか。

- 人間の多面性を意識したマルチセクターアプローチを重視する。
- 現地でのネットワークの強化を図る。
- 気づき(支援する側も含めて)が必要。

聞く耳をもつ

言い訳をしない

現場からみた 人間の安全保障

Bグループ
渋谷、西村、古澤、柳川、渡辺

1

JICAプロジェクト

TESDA女性センター強化プロジェクト

2

JICAプロジェクト

TESDA(その1)

	現状	提言
弱者への配慮	<ul style="list-style-type: none"> 多様な貧困層をターゲット 	<ul style="list-style-type: none"> OFWへの配慮 社会問題への取組み
アクター間の連携	<ul style="list-style-type: none"> NGOへの間接的な技術支援 起業への支援 	<ul style="list-style-type: none"> 地方政府との連携? マーケティング分野におけるTESDAネットワークの活用 プロジェクト終了後のフォローアップ JICAのプロジェクト間の緊密な連携促進

3

JICAプロジェクト

TESDA(その2)

	現状	提言
エンパワーメント	<ul style="list-style-type: none"> 内面的なエンパワーメント ジェンダーに配慮した技術コース 	<ul style="list-style-type: none"> ジェンダー配慮に関する対外的発信(雇用主、広報等)
その他(バヤタス)	<ul style="list-style-type: none"> 構造的課題(地主、住民G、TG) バヤタスの子供の高就学率 	<ul style="list-style-type: none"> マルチセクター・アプローチ(廃棄物・教育・保健行政)

4

NGO(草の根援助運動)プロジェクト

マニラ湾漁民による沿岸資源管理プログラム(CB-CRM)

5

NGO(草の根援助運動)プロジェクト

CB-CRM(PRRM)

	現状	提言
弱者への配慮	<ul style="list-style-type: none"> 入会しやすい 弱者(ドラッグユーザー等)への配慮ができていない 	<ul style="list-style-type: none"> POによる未組織住民を巻き込む仕掛け
アクター間の連携	<ul style="list-style-type: none"> PO間の連携 POと行政の連携 	<ul style="list-style-type: none"> ポストPRRMに向けた連携強化 地方政府による持続的なサポート
エンパワーメント	<ul style="list-style-type: none"> 成功事例の波及 副次的収入による生活の安定 POによる政策提言 	<ul style="list-style-type: none"> 行政による漁業復興策
上からと下からの働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> 行政と住民へのバランスのとれた働きかけ 	<ul style="list-style-type: none"> アクター(行政、住民)のニーズに合った働きかけの継続

6

プロジェクトのまとめ(何を学んだか)

	TESDA(JICA)	CB-CRM(PRRM)
弱者への配慮	・間口狭い(高卒以上) ⇒職業訓練を通じて(結果的に)弱者の受け皿となっている面がある	・間口広い(PO中心) ⇒未組織住民の downturn riskの低減が課題
エンパワメント	・個人(研修受講者)に焦点 ・固定観念(性的役割分業)への挑戦 ⇒内面的エンパワメント ⇒内からの変革	・組織(PO)に焦点 ・行政への働きかけ(漁民の権利の条例化) ⇒コミュニティのエンパワメント ⇒外からの変革

外部者の役割

	JICA	草の根援助運動
現状	運営資金と専門的知見の提供	資金援助と国内での開発教育
提言	社会問題に対する取り組み ⇒TESDAの現状の改善(例) ・入学資格の緩和 ・ジェンダーに配慮した研修コースの充実 ・インパクト調査の実施	橋渡しの役割 ⇒グット・プラクティスの波及(例) ・フィリピンの他地域への波及 ・日本国内における啓発活動

私達の今後の取組み

- 我々一人ひとりが触媒(catalyst)としての自覚を持つ
 - ・自分を変える(職業人として、社会の一員として)
 - ↓
 - ・周りの人たちの意識を変える
 - ↓
 - ・地域社会・行政を変える

JICA-NGO相互研修
～人間の安全保障の視点から～

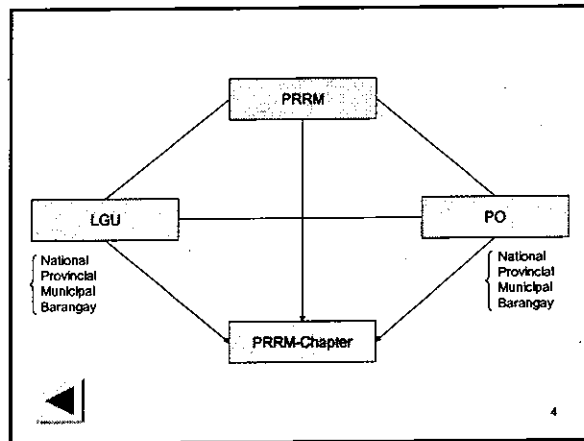
Cグループ
色平・岩崎・久保・橋場・森

JICA / TESDA

視点	インタビュー項目	現状	人間の安全保障からみた改善案
弱者への視点	研修参加者 より貧困層への波及効果	難しい入学試験(意欲) 経験の共有あり(精神・技術)	研修生の選考 アドボカシー
エンパワメント	元研修生の現状 経済的エンパワメント 経済以外のエンパワメント	就職率の差 エンパワメントが認められる(OJT、証明書) 女性への固定観念へのチャレンジ	適正判断 研修コース改廃(注:ジェンダー) 卒業生とのネットワーク
アクター間連携	外部への情報発信	多方面	外部関係者へのジェンダー講習
その他重要な視点	運営費用 研修による技術の適応性	JICAの負担部分も大きい ニーズとの乖離(短期研修)	参加者にあった研修コース

NGO / PRRM

視点	インタビュー項目	現状	人間の安全保障からみた改善案
弱者への視点	POの参加条件 研修のレベル 最貧困層への支援	入れない人もある 適切と考えられる PRRMのCrede PO対象の研修	組織活動に参加する機会 の提供 PO活動のモニタリング
エンパワメント	ニーズ把握の方法 組織活動における主体性	POによる調査で決定(女性組織) 漁民による共有資源保護問題の明確化・認識化	
アクター間連携		行政との良好な関係 政治的不安定要因 プログラムに参加しない人々 と地域開発	
その他重要な視点	PRRMの独自性 撤退後の運営費用	継続的支援(資金・研修) 撤退とは? POの自立性と行政サービスの増進	BANTAY DAGAT の行政サービス化



人間の安全保障の視点からみた気づき

- ・ コースの改廃とジェンダー配慮のトレードオフ
- ・ TESDAと頭脳流出
- ・ カプニタン村の事例分析:コモンズの悲劇
- ・ 複眼的視点と多様性
- ・ ローカルとグローバル
- ・ 構造的問題へのアプローチ

コースの改廃とジェンダー配慮のトレードオフ

